
うりこ姫と天の邪鬼

鹿の子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

うりこ姫と天の邪鬼

【Nコード】

N5291P

【作者名】

鹿の子

【あらすじ】

恋に素直になれない人たちの物語。

うりこ姫こと由梨子と、バツイチで子持ちのよう曜。

由梨子の兄でパン職人のニイと、近所のお肉屋さんの看板娘の沙希。曜とニイの同級生の、貴和子と窪田。

それぞれの恋を描いていきます。自サイトでも公開中。

1・うりこ姫と天の邪鬼（由梨子・曜）

いつもぼんやりしている、とか。

頭の上をたんぽぽの綿毛が飛んでいる、とか。

人は私のことをそんな風に言うけれど。

私だって。

人に言えない悩みを持つ日々を、送っていたりするのだ。

「……よっす」

ガラスのドアから、寝ぼけた顔した曜ちゃんがお店の中に入ってきた。

「おはよう、曜ちゃん」

背の高い体が少し猫背になったままで、曜ちゃんはトレイとトンネルを手にした。

「『いらっしやいませ』、だろうが。売り子姫」

ぶつぶつ言いながら、曜ちゃんは棚にあるコロツケパンを取った。

「はいはい、『いらっしやいませ』」

私はカウンターの中で、消毒薬のついた布巾で溜まっていたトレイを拭き出した。

「曜ちゃん、ドーナツは揚げたてだよ」

うちは家族でパン屋をやっていて、兄と父が職人としてパンを焼いていた。

母は経理やなんやかんやの雑務をしていて、私は主に『売り子』としてお店に立っていた。

そしてこの低血圧そうな顔したお客サマの曜ちゃんは、二つ年上の兄の同級生だ。

曜ちゃんは、何年かこの町から離れて暮していたのだけど、つい

何ヶ月か前にまたここに戻ってきたのだ。

「ぼーっとしてないで、会計」

とん、とカウンターに曜ちゃんがトレイを載せた。

その上には、クロツケパンの他にシナモンドーナツやチョコレー
トドーナツ、そしてクリームチーズとトマトのサンドイッチが載っ
ていた。

「あ、ごめん、ごめん」

そう言いながらレジを打とうとしたその瞬間、レジに貼り付けた
小さなカレンダーに目が行った。

「あっ。今日」

「何だよ」

「結婚記念日だね」

十月十日の今日は、もと体育の日でもありそして曜ちゃんの結婚
記念日でもあった。

「『おめでとう』なのかな？」

「あゝ？」

「うーん、なんて言えばいいんだろう」

「何も言うな、ボケ」

ほら、早く会計しないと金を払わねえぞ、と曜ちゃんが言い出し
た。

「あ、ごめん。ごめん」

曜ちゃんを選んだパンを見ながらレジを打つ。

クロツケパン

ドーナツ 二個

サンドイッチ

「大体な、離婚したのに結婚記念日を祝う奴がいるか」
ぼろりと曜ちゃん言う。

「残念、だったね」
金額を曜ちゃんに告げ、パンを入れるべくビニール袋に手をかける。

「そういえば曜ちゃん。うちのお店の袋って持っていなかったっけ」
うちのパン屋ではエコロジーとお客様のリターンを狙いに、特製の布袋を用意していた。

最初は、二百円でこれを買ってもらっただけど、次回からはこの袋を持って来てくれたお客様には合計金額から五％を引くサービスをしていた。

「ああ、持っていないな」
でもうちの母さんは持っているのか？ と曜ちゃんは首をかしげている。

「じゃあ、これあげるよ。私からのプレゼント」
カウンターの下から、ビニールでなく布の袋を取り出す。
あとでレジに袋代を入れることを忘れない様にしないと、と思うながら。

「まさか、『結婚記念日』のお祝いになんて言うんじゃないだろうな」

曜ちゃんが皮肉な笑いを浮かべる。

「えへ。ばれた？」

布袋のとつてを曜ちゃんの方に向ける。

全くこのアホ娘は、と言いながら、曜ちゃんは千円札を出してきた。

それをレジに入れて、私はお釣りを曜ちゃんに渡す。

毎回少しだけ、その瞬間に曜ちゃんの手の平に私の指先が触れる。

「おまえ、いつまで『売り子姫』やってんの？」

袋を持った曜ちゃんが私に聞いてくる。

「いつまでって、夜は八時までだよ」

プツと曜ちゃんが笑う。

「俺が言いたいのは『山下 由梨子さんもよいお年頃になったけど、お嫁にもいかないで一体いつまでこのお店で働いているんでしょ、うね』って意味のこと」

「お嫁に行ってもここで働けるもん」

「まるで相手がいそうな台詞」

「そんなの教えない」

「別に聞きたくない」

「そっ」

曜ちゃんにそこを突っ込まれなくて、悔しいんだか淋しいんだか。

でも、聞かれても話すことがないわけだから、まあ、良かったと言えるのかもしれないけど。

「あつ、由梨子。昨日、琴と遊んでくれたんだってな。サンキュ」
曜ちゃんが初めて優しい笑顔をこっちに向けてくれた。

琴ちゃんは、曜ちゃんの娘だ。

曜ちゃんは琴ちゃんを連れて、この町に帰って来たのだ。

「いつ、いいよ。暇だった、から」

突然のその笑顔に焦ってしまい、言葉がうまく喉から出てこない。

そんな私を見て、曜ちゃんが口の端だけを上げて笑って、手をひらひらと振ってドアを出て行った。

ガラス越しに、曜ちゃんの長い足が道路を横切っていく姿が目に入る。

昔からそう。

いつも私は、曜ちゃんのこの姿を見ていた。

お店にパンを買いに来て、私に一言二言何か言って、そしてまたお店を出て行く。

そして私は、その有るかないかの一言の為に、このお店から出られない。

ここにいれば、曜ちゃんと会う可能性があるから。

でもやっぱり、曜ちゃんがこの町からいなくなった時に、私も直ぐにここから出て行けばよかったと思う。

つい、あれこれと考えて、そんなことを言えないままに過ごすうちに、また曜ちゃんが戻ってきて。

そしてまた。

私はここから出られなくなってしまった。

曜ちゃん。

—— 曜ちゃん。

私なら、曜ちゃんを大切にするのに。

私なら、寝ぼけた顔の曜ちゃんも、口の悪い曜ちゃんも。どんな曜ちゃんも大切にするのに。

なのに、私にはその役目は回ってこない。

「うー。進歩ないぞ、私」

今日は十月十日。

もと体育の日。

曜ちゃんの結婚した日。

そして。

曜ちゃんが、私のものにはならないと決定的になった日でもあった。

2・うりこ姫と二人の天邪鬼（由梨子・曜）

「ねえ。ケーキを焼いてあげようか？」

パンを買いに来ている曜ちゃんに、私は思い切って言ってみた。細い体を折り曲げてパンを見ていた曜ちゃんは、私のその声でゆっくりと体を起こしてこっちを見てきた。

少し寝不足で低血圧の曜ちゃんの顔には、うすつらと髭が生えていた。

「なに、ここって経営難で、ついにケーキ屋にでもなったのか？」
「そう言いながら曜ちゃんは、うちの店内をじろじろと見だした。」

「どこにもケーキの案内は、ないようだけどな」

そう言うとき曜ちゃんは、トングでクリームチーズとトマトのサンドイッチをぱつと掴んでトレイの上に載せた。

そしてそのまま私のいるレジまでやって来た。

「うちは、ケーキは売っていないけど」

レジに曜ちゃんの買ったものを打ち込む。

「はい、四百円。―― ケーキは、ほら。今、私習いに行っているし」

そうなのだ。

実は私は、今年に入ってからお菓子教室に通っているのだった。

「あ、五百円お預かりします。百円のお返しです。―― 曜ちゃん、お誕生日だし」

曜ちゃんは、二月生まれさんだった。

「あんまり甘くないケーキを習ったの。ココア風味なんだけど。琴ちゃんもココア好きだし」

琴ちゃんは、曜ちゃんの一人娘だ。

曜ちゃんは、離婚してから、生まれ育ったこの町に娘の琴ちゃんを連れて戻ってきたのだ。

「だから、いいかなあなんて。……ちょ、ちよつと、曜ちゃん。話がまだ途中」

人の話を背中でビシッと跳ね返しながら、曜ちゃんは手をひらひらと振ってお店から出て行ってしまった。

「泣けるね」

厨房から兄が、バケツをトレイに載せて出てきた。

たちまち店内に香ばしい香りが広がる。

兄は、うちのパン職人だ。

「まあ、あいつも天邪鬼だから」

兄は、そう言いながら、丁寧にバケツを並べ出した。

「由梨子が本気なら、地道にいくしかないね」

私の片思いを大昔から知っている兄は、普段はそんなことに関心がないような素振りを見せながらも、たまにこういったことを言うてくる。

「お兄ちゃんてば。ほんと、たぬきオヤジなんだから」

どんな相手にも、自分が片思いをして（しかもそれがいつまでたっても、空振りだなんて）知られたくはないことだ。

「まあ、作ってみなよ。きつとあいつは、おまえの言ったことなんて忘れていくかのような顔をして、自分の誕生日の日もここにパンを買いに来るんだろうから。そうしたら、無理にでも押しつけちゃえばいいさ」

兄と曜ちゃんは、ずっと仲が良かった。

その兄が言うなら、それはそうなのかもしれない。

「ついでに曜に、おまえ自身も押し付けちゃえ」

「……へ？」

兄の言葉に目が点になる。

「由梨子さあ、人生なんてたったの一度きりなんだぜ。なのに、一体なにを迷って立ち止まっているんだあ？ やるときややんなきゃ、

どどんん時は過ぎていくんだって。全く、おまえを見てると腹が立ってくるよ」

兄はそう言いながらも、私を見るわけでもなく、どこか遠くを見ているようだ。

そして突然、白い作業着を脱いだかと思うと、シャツ一枚の姿になった。

「おまえを見ていたら、なんか俺もこのままじゃいかんと思って」
そう言うなり、バケットを一本持つと、ぱっと私の方を見てきた。

そしてバケットを、漫画で打者が投手に向かって予告ホームランを宣言するときの様にこっちに向けてきて、「これから俺は、向田沙希にプロポーズしてくる」と言ったかと思うと、お店の前につけてあった自転車にまたがって、いなくなってしまった。

「お、お兄ちゃん」

今は二月で。

まあ、確かに今日は暖かくて十二度はあるけれど。
それでも。

「半そでだし」

お兄ちゃん、風邪引き大魔王なのに。

それにお兄ちゃんってば。

向田さんが、好きだったんだなんて。

ご近所で同じ年で、お肉屋さんの向田さんを、「生意気な女だ」
って昔から兄は、毛嫌いしていたようだったのに。

「人って、わかんないもんだな」

しみじみとそう思いながら、レジ袋の整理をしていたら、幼稚園への送りが終わった常連のママさんたちがニコニコしながらお店に

入ってきた。

レジをうちながらふと顔をあげると。

シヨウウインドウのむこうに見える梅の木に、ピンク色した小さな花が咲き始めているのが見えた。

二月は寒いけど。

でも、静かに春の準備を始めている。

季節が、動き出している。

ケーキ。

がんばってみよう。

そうよね、一度きりの人生だもん。

ダメでもともとで、ぶつかってもいいのかもしれない。

今までみたいは何もしないよりも、結果はどうでもそれはずっといいことなんだ。

そうしないと、私はいつまでたってもここで立ち止まったままだ。

今度こそ。

結果は、どうであれ。

好きな人に好きと言える。

自分になりたい。

3・うりこ姫と二十円と天邪鬼（由梨子・曜）

なんとか逃げられると思っていたのに、家まであとわずか五メートルというところで私は捕まってしまった。

そして捕まっただけでなく、キスまで。

思いつきり相手の足を踏んでパンチした視界の隅に、猫背の曜ちゃんひゅうと小さく口笛を吹く姿があった。

「いらっしやいませ」

お店のドアが開いた気配を感じて私は入り口に視線を移した。

「よっす」

曜ちゃんだった。

「……おはよう」

毎朝確認する星占いによると、今日の私（の星座）は「神経質にならずに、周りの人の親切を素直に受け入れて」だそうなの。

しかし。神経質にならないでいられるだろうか（否）。

今日これから曜ちゃんに、想いをこめまくったお誕生日のケーキを渡すっていうのに。

悲しいかな。その想い人の曜ちゃんに、私は昨夜とんでもないシーンを見られてしまったのだ。

本当だったら、今日くらいは曜ちゃんとは顔を合わせたくはないのだけれど、その今日こそが曜ちゃんの誕生日なわけで。

だから私は、女は度胸とばかりにいつもの朝と同じようにレジに入っていたのでありました。

何よりも先ずは、あのとんでもない状況の説明を。

「曜ちゃん、あのね、昨日のことなんだけどね」

トレイとトングを持った曜ちゃんに話し掛ける。

「高校の時の友だちとご飯を食べる約束をしていて。そうしたらその子の彼氏とその友だちっていう人までやって来て」

彼女と二人だけでご飯を食べるつもりだった私は、心底驚いた。

「それで、その友だちって人が、帰り私を送るなんて言い出して」
何度も断ったのに、帰る方向が同じだからって言ってその人はついてきた。

「もう、嫌で嫌で。だから家に電話してお兄ちゃんに駅まで来てもらおうって思ったのに、お兄ちゃんってばいなくて」

兄は妹の大ピンチだっていうのに、向田さん絡みの用事があったように留守だったのだ。

「それで、なんか、あんなことに」

ああ、思い出す度に悔しくなる。

ただ触れたただけだけど、相手の唇の感触は今でも覚えている。

曜ちゃんはベーコンエビとサンドイッチをトレイに載せたあと、ガラス張りの小さな冷蔵庫からカフェオレの缶を取ってまたトレイに載せた。

私からは曜ちゃんの背中しか見えない。

私の話が聞こえているんだかどうか、そんな反応さえ読めない。

「わあ、ママ！ パン、パン」

子どもの高い声とともにドアが開き、それと一緒にその子のママさんがお店に入ってきた。

常連さんだ。

「いらっしやいませ」

曜ちゃんから視線をお客さまの方に移す。

「ああ、琴ちゃんパパだあ」

その子が曜ちゃんを見て叫ぶ。

「おはよう」

曜ちゃんがやさしい顔でその子に挨拶をして、その子のママにも小さくお辞儀をした。

「おはようございます、今朝も寒いですね」

そう言いながらリズムカルに常連ママさんはトレイにパンを載せてその勢いでレジまでやってきた。

「お先にいいのかしら？」

ママさんが私と曜ちゃんに尋ねるように言ってきた。

「はい、どうぞ」

曜ちゃんの返事を聞かないで、私はレジを打ち出す。

レジを打ちながらも、しっかりと意識は曜ちゃんに向けていた。

「可愛い子だったね」

曜ちゃんにそう声を掛ける。

「ああ」

そういったことには、曜ちゃんはちゃんと返事をしてくれる。

曜ちゃんには、琴ちゃんという可愛い娘がいる。

曜ちゃんは奥さんと離婚したあと、娘の琴ちゃんを連れて生まれ育ったこの町に帰ってきた。

そして私かというと、曜ちゃんが琴ちゃんのパパになるうんと前からずっと曜ちゃんのことを好きだった。

長い長い片想いだ。

でも最近は、このままではいかんと思い、なんとか曜ちゃんの生活の中に入り込みたいと、あれこれトライをしているのでありました。

……結果は、ご覧の通り。

「曜ちゃん」

曜ちゃんが選んだパンのレジ打ちをしながら、名前を呼んだ。

心臓が痛いくらい大きく動いているのがわかる。

「なんですか」

曜ちゃんは、ポケットから小銭入れを出し、返事をしてきた。

「あの、さっきの話。曜ちゃんに聞こえていたかどうか知らないけど、つまりはあの人と私は何も関係がないってことで」

指先が震えているのがわかる。

レジのキーを押し間違えないように、いつもよりもゆっくりと作業をする。

そして合計金額を曜ちゃんに告げる。

「もしかして曜ちゃんは私が曜ちゃんにいろいろかまったり、こんな風に説明をしたりすることに特に意味はないとか、曜ちゃんがお兄ちゃんの友だちだからとか、そんな風に思っているかもしれないけど、そこにはちゃんと意味があった」

曜ちゃんが私に五百円玉を渡してきた。

「はい、五百円お預かりしましたので、二十円のお返しでございます。——— だから、それは、私が」

「ちょっと待て」

曜ちゃんが言う。

「由梨子」

曜ちゃんがいつもと違う真面目な声で私の名前を呼んできた。

声だけじゃなくて、曜ちゃんの表情もいつもと違った。

「いないんだ」

二十円を持ったまま、私は動きが止まる。

——— いない、って。

「お釣りが？」

そう言っ、二十円を持った手を少し高くした。

「いや。釣りは、いる」

そう言っていると曜ちゃんは、私が二十円持った手の下にその骨ばった大きな手を広げた。

私の手から十円玉が二枚。

曜ちゃんの手のひらに向けて落ちていく。

「そういった感情。いらないんだ」

曜ちゃんはそう言うとその二十円を小銭入れじゃなくてそのままポケットに突っ込んだ。

「別に由梨子がどうのってことじゃなくて」

そう言うとき曜ちゃんはパンの入った袋をレジから取った。

そしてそのまま、お店から出て行ってしまった。

「バケット焼けました！」

奥のドアが開いて、兄が肩にパンの入ったトレイに載せて入ってきた。

何も知らない兄は、お店の棚にバケットを並べだした。

「今日もいい具合に焼け……」と言った兄の顔が、私の顔を見てぎよっとした表情に変わった。

「おまえ、どうした？」

バケットを手早く棚に並べた後、心配そうな顔をして兄が私の顔を覗き込んできた。

「お兄ちゃん」

「はい」

兄が真面目な顔で私を見る。

「ダメでした」

「あ？」

「ふられました、曜ちゃんに。……二十円にも負けちゃったよ」

二十円は曜ちゃんの手の中に、ポケットの中にだって入ることが出来たけど。

私はダメだった。

ちゃんとした告白さえも受け取ってもらえないままに、私はふられてしまった。

兄は大きな体を左右に揺らしながら、低く唸り声を上げ出した。熊みたい、なんて兄の様子をぼんやりと眺めながら、頭の片隅で曜ちゃんへのケーキの処分の仕方についてあれこれと考えた。

4・そんなんじゃ、わかりません。（沙希・ニイ）

「ガーデン」とはお世辞にも言えない様の猫の額ほどの家の庭で、それでも豪快に干しまくったシーツが春風に揺れるのを見ていたら、のっそりと季節外れの入道雲が顔を出した。

「……ニイ」

ニイって渾名あだなのコイツは同じ年で、同じ街の商店仲間だ。
うちはお肉屋。

ニイの家はパン屋さん。

そして悔しいけれど、ニイの家のパンは世界一うまい。

デパ地下にある外国のパン屋さんよりも、私はおいしいと思う。
なあんてことは、ニイには言ったことないけれど。

「休憩か？」

格好だけは季節の先取りをしているニイはそう言うと、縁側に寝転んでいた私の隣に断りもなく座った。

ずうずうしい。

「休憩っていうか、今日は私はお休みなんだ」

お休みだからゆえに、朝から洗濯なんかをしちゃっているわけで。

そしてお休みなのに洗濯を頼まれちゃう（そしてそれをやっちゃう）私って、絵に描いたような孝行娘だわ、と思う。

「ああ、休みか。ってことは時間があるってことで、この間の返事を聞かせてもらおうかな」

そう言うとニイは、ふふんなんて顔して私を見下ろしてきた。

返事。

つまり、この間のあれは冗談ではなかったってことだね。

ついこの間のこと。

どんなに鼻屑目に見ても仲なんて良くもなかった私に、ニイはバケットパンを持って（勿論ニイの家の）プロポーズをしてきたのだ。

しかもその時はお店を開けたばかりで、店内ではお父さんや弟たちがバタバタと仕込みをしている状態で。

プロポーズ。

つまり、一般的にはそれは結婚の申し込みの意味である。

一瞬お店にいた全員の動きが止まったのは勿論、私なんて、つい後ろを振り向いて誰に言ったんだろうって確認しちゃったし。

（そんな風な動きをした私の頭を、ニイはあろうことか持参したバケットで叩いたのだ！）

ともかく、お父さんとお母さんは涙を流して大喜びするわ、弟達たちだって大きく安堵の溜め息をつくわ。

私という当事者以外は、そりゃもうニイに向かって拝むような勢いで歓迎の態度を示していたわけ。

私もねえ、別にさ。

独身主義ってわけでもないんだけど、つまりがたまたま何故かご縁が無かったもんで。

ふと気が付くと、まあまあいいお年になって現在に至るというか、そんな感じで。

しかし、だからって、この隣に座るニイと結婚っていうのもねえ。

だってさあ。

「あのさ。聞くけどさあ。私達、仲良しじゃなかったわよねえ？」
起き上がってニイに言う。

本当のところ、仲良しじゃないなんて表現は控えめなくらいだ。
商店の子で、一番年が上なのがニイと私で、（つまり、ニイのあだ名の由来は「おにいちちゃん」だ）そこで私とニイとはことごとく対立した間柄だったのだ。

商店が集まって催す福引での、子ども用の賞品を選ぶときも。

児童館での上映する映画の選択でも。

更に言うのであれば、高校の文化祭でも。

ことごとく私はニイに敗れていた。私よりもニイの意見が通ってしまうのだ。

そんな話の持っていく方というか、立ち回りの仕方というか、ニイは上手いというか卑怯というか。

突き詰めていくと、ニイが上手いというよりも私が下手とも言えるのかもしれないけれど。

……まあ、ともかく。

だからそんなニイが、よりによって私にそんなことを言うなんてわけが分からないのだ。

「仲良しでは……なかったなあ」

ニイが言う。

自覚、あるじゃない。

ニイの「仲良し」さんで私がぱっと思いつくのは、山口君に窪田君にあと有島さん。

ニイも入れたあの四人は、高校時代いろんな意味で目立つ人たちだった。

「でも」

ニイが話し出す。

「だからって沙希のことが嫌いだったわけじゃない」
そうニイが言う。

その発言は、ちょっと意外だった。

「え？ そうなの？ 私はてっきりそうだと思っていたけど」
私のことが嫌いだから、ことごとく反対するのかなあって。
私ってそんなされるほど、ニイにとって嫌な奴かなあって。

表面上はニイに対立するしているポーズをとりつつも、みんなから信頼されているニイだからこそ、その姿勢をとり続けるのは辛かった。

「ふーん。そうなんだ。あれは、私のことが嫌いだからそうしていったってことじゃなかったんだ」

へえ。

ふーん。

体の力が抜けていく。

まるで、心の奥の奥にあった小さな小さな硬い石ころがすつと消えていくような感覚だった。

ニイに嫌われていたわけじゃないんだ。

へえ。

ふーん。

よかったなあ。

「……もしかして、ずっと沙希はそんな風に思っていたのか？」

「うん」

「……俺の気持ち、全然知らなかった？」

「うん。気持ちって？ ……えっ」

ニイと目が合う。

う、うわあ。

な、なんだか、いつもとは違うニイの表情。

偉そうでもなくて、意地悪そうでもなくて。

なんていうか、ほら、ドラマなんかでよく見る、男の人が女の人に「好き」って言いそうなアレよ。

あれれ。

ちょ、ちょっと待ってよ！

「……お願いだから、ニイ。『ずっとそうだった』、なあんて言わないでよ」

ニイが怒ったような顔をする。

「なんでだよ」

なんでだよ、ってこっちが言いたいわ。

「……あのね、ニイ。だからね、そのさあ。分からないって、フツ
ー」

「……この、どアホウ。こう、ことごとく俺がおまえに絡んできた
わけをさ、考えるだろう。フツー」

「どアホウ？　ねえ、どアホウって言った？　アホだけじゃなく、

『ど』までつけたわよね？　おまけに『ホ』のあとに小さな『ウ』
も聞こえたような。あー！　腹が立つう！　何なのよ、一体。突

然お店に来て変なことを言うわ、今日みたいに人がゆっくりと憩い
のひと時を過ごしているときにガツリと乗り込んでくるわ。あん
たは、アレキサンダー大王かつ！」

「変なことって、プロポーズのどこが変なことなんだよ！　で、な

んでアレキサンダー大王が出て来るんだよっ！」

「だったら、織田信長。読めない動きをするなっていうの」

「読めない動きって、そもそも沙希が俺の行動や気持ちを読もうと
しなかったんだろ？」

「え？　つまり私のせいってこと？　なんで私がニイのことそこま
で考えないといけないのよ」

「つまり沙希は、そこまで俺のことを嫌っているってことかよ!」
「何を言っているのよ! 嫌いなのはそっちでしょ? ニイが私のこと嫌いなんでしょ?」

「何を聞いているんだよ! だからそうじゃないって言っただろう? 沙希が俺のこと嫌いなんだろう?」

「何を言っているのよ! 私がいつニイのことを嫌いだなんて言ったのよ! 嫌いじゃないわよ、好きよ!」

……え……。

ニイがにっこりと微笑む。

「コホン。じゃ、まあ、そういうことで。俺、帰りに店に顔を出しておじさんたちにも挨拶をしていくから」

やられた。

そうなのよ、こういうところなのよ、ニイに負けちゃうのって。

「……ニイと結婚なんてしないもん」

「まあまあ、そう言わずに。したら、楽しいって」

……それは、まあ、そうかもしれない。

ニイとしゃべるのは、まあ……面白い。

特に、もう、この言い合いもニイが私が嫌いだってところからきていないって思うと……ねえ。

そんな私の心の動きを知ってか、ニイが微笑む。
ちょ、ちょっと待て、私。

あの微笑み。

あれは、今まで何千回とも何万回とも見たことがある、ニイの勝
利的スマイルで。

……ああ、嫌なこと思い出した。

福引での子ども用の賞品のお菓子。

袋詰にするお菓子の最後の一品で、私の一押しのマーブルチョコ
は、ニイの一押しのビクリマンチョコに負けたのだ。

あの時も、こんな顔で笑って私のことを見ていたっけ。

……ああ、嫌なことを思い出した。

高校の文化祭での模擬店案で、私の一押しの焼き鳥はニイ一押し
のホットドックに負け、私は屈辱のケチャップにまみれながらニイ
の指揮のもとにホットドックを作ったんだっけ。

そうよ、そうよ。

その時も、私の顔見て、あんな顔して笑っていたわよ。

ああ、危ない、危ない。

危うく、ニイ・ワールドに引き込まれるところだった。

今回ばかりは、一生ものの判断だから、迂闊にニイに屈してはな
らないのだ。

今回ばかりは、断固ニイの意見には反対しなくちゃ。

そもそも、ニイが言うとおり今までのあれが本当に愛情表現だっ
ていうのなら、それってやっぱり酷いことだと思う。

そうよ。あんな風にされて喜ぶほど私は人が良くないのよ。

それに、そんなことが当然許されるなんて思っているのなら、ニ

イの頭はどうかしている。

パンを作るのは上手くても、精神構造上に問題ありだわ。

「やっぱり、やめた。」

ニイに言う。

「はあ？ それ、どーいうことだよ」

ニイが突っかかってくる。

「どーいうことも、こーいうこともなく、そーいうことっ！」

私がそう言っただけに入ろうとするとニイが腕を掴んできた。

「ちよっと待てよ」

「待ちません。あ、貴希^{たかき}！」

部屋の向こうの廊下を歩く弟の貴希に声をかける。

貴希はニイを見るなり顔を輝かせている。

それは、「早くこの姉を嫁に貰ってくれ」というかのような輝きだ。

そうはいくかいっ！

「お客様、お帰りです」

私がそう言っていると貴希は一瞬驚いたような顔をしたあと、しょうがないなあって感じでこっちにやってきた。

「ニイさん、こんちは。で、ちよっと失礼します」

そう言っていると貴希は庭のサンダルを突っかけてニイの側に立つと、ぐいっとニイを持ち上げた。

「はい、貴希くん。あとはよろしくね」

私がそう言っていると、啞然とするニイを担いで、貴希が庭から外へ出て行った。

私と貴希たち弟は協定を結んでいて、弟達の彼女について彼らの味方となることを引き替えに（親に何か言われた場合）、私のボディガードをすることになっていた。

何しろ、彼らは町で一番でかい兄弟ということでは有名でもあって。

ニイもでかいが、流石に町一番には叶わないのだ。
持つべきものは弟。

役立つ。

「今度こそは、ニイには負けない」

いや。しかし。

何をもって勝つって言うのかよくわからないけれど。

まあ、ニイのことだからまた何か仕掛けてくるだろうし。
この話もこれでおしまいってことではないと思うから。
それに今回は、ニイばかりが優勢ってこともないし。

「なんか、面白くなってきたなあ」

急に生活に彩りが出てきたような。

そんな思いをもちながら、庭で揺れるシーツを眺めた。

5・月と手を繋ぐ（貴和子・窪田）

「だからもう、大変なんだってえ」

サラダ菜をつつきながら、ニイが言う。

そんなニイの様子に口の端だけ歪めて曜が笑っている。

更に、そんな二人を見て窪田が幸せそうな顔をしてお酒を飲んでいる。

そして、そんな男たちと一緒にお酒を飲むのが、この私。

「……はいはい。で、何が大変なんだって？」

私の質問に、待っていましたとばかりにニイが話し出す。

「いや、だから。あいつの弟たち。ガードが固いんだか緩いんだか態度が一貫してなくてさ」

「弟？」

どこの誰の弟のことを言っているのだろうと、曜を見る。

この中ではニイと一番仲がいいのは、何と言っても曜だから。

曜は私のことを目の端だけで見ると必要最小限の口の筋肉を使つて、「向田 沙希のところの弟たち」と言った。

向田 沙希。

「向田 沙希って、あの向田 沙希？」

私がそう言うと、窪田は「ヒュー」なんて口笛を吹いた。
おぼか。

窪田を睨みつつニイに、「あんたって、小学生男子的愛情表現をする男だったんだあ」と呆れながら言った。

すると、「ほんと、ニイはおぼかだねえ」と窪田も言った。

「面目ない」

酔っているのか、やけに素直にニイがそう答えた。

「十年遅いって」

曜がニイに言う。

「ほんとだよ。彼女のことを好きなんなら十年前にそういう態度に出ればよかったのにさ。ニイの態度は明らかにその逆だったもんねえ」

そうだったよねえ、なんて私に相槌を求めるような笑顔に向けて窪田が言う。

その笑顔を九割がた無視して、「ほんと、おばか」とニイに言う。

でもその言葉は、窪田を邪険にしちゃうほど意識している自分に向けての言葉でもあったり。

「まあさ、あんたたちがこれからどうなるか知らないけど、私が向田 沙希ならニイの気持ちを受けれるかどうかは不明だな」

そう言うのと、ニイがぎょっとした顔をした。

「ニイに限らずに、あの小学生男子的愛情表現っていうの？ あの好きな子にはなんたらって、あれ。はつきり言って最低だよ」

ニイの顔が青くなる。

「あんまりな態度をされると、女の子だって傷つきます」

「そうか。貴和子も女だったか……」

「あんだね。そーいうこと言っていたら、一生向田 沙希に相手にされないわよ」

「言えた」

「……あんたはあんだで、いつも必要最小限の合いの手しか入れないし」

私がそう文句を言うと、曜は珍しく顔の筋肉まで使って笑いだした。

そしてそんな曜の顔を見ていたら、なんだかこっちまで笑いたくなってきた。

「ニイも前途多難だねえ」

窪田が暢気な声で言う。

「そんなおまえはどうなんだよっ！」

ニイはそう言うのと、「年上の美人の彼女さん、元気？」なんて窪

田に言って、窪田も窪田でそのニイの質問に答えるべくなにやら話し出した。

顔は完全にその二人からそらしつつ、その実、耳だけでしっかりその内容をチェックしていた私に、曜が日本酒を注いでくれた。

その注ぎ方がイヤラシイ。

「……あんたって、嫌な奴ね」

ぼそつと曜に言うのと、曜は心外そうに少しだけ眉毛を上げた。

「貴和子も十年遅い組だな」

何もかもお見通しって口調で曜が言う。

くやしい。

「あんたは、どうよ」

反射的にそう言い返す。

「うーん。なんとも言えないなあ」

あらま、って感じの意外な返事が返ってくる。

「まあ、過去はどうにもならないから、今を生きるしかないでしょう」

「あ、その台詞。この間見た、ドラマの再放送で同じようなこと言っていたわ」

「それ『漂流教室』でしょ」

窪田がいきなりこっちの会話に参加してきた。

「あんたに話してないって」

一体窪田はどこから聞いていたのよ、って焦りながらそう切り返す。

「貴和子がいじめる」と窪田がニイに言う。

「一生言ってな」

そんなことしか窪田に言えない自分に落ち込み、一気にお酒を飲んだ。

ニイは朝が早いからという理由で、曜は一人娘の琴ちゃんが待っているからって理由で、飲み会は早々に終了した。

まあ、スタートが五時ですから（今日は土曜日）、三時間飲んでもまだ八時。

かくいう私も、明日は姉の結婚式の引き出物を見るのに付き合うので（婚約者は海外出張だそうなので）、それなりに忙しい明日っていうのが待っていたりした。

「ああ、面白かったあ」

窪田がうーんと伸びをした。

「うん、楽しかったね」

高校の同級生で、卒業してもなんとなくこう会っているのには、一つは地の利もあったと思う。

曜とニイほどではないにせよ、私たちもまあ近い場所に住んでいたから。

「ニイが向田さんのことを好きだなんて、僕は知らなかったなあ」

窪田が言う。

「ニイも愚か者だよな」

人のことなら何でも言えちゃうってことで、そう言う。

「ほんと。好きなら好きって、なんで言わないかなあ」

「……まあ、そんな単純なことでもないと思うけどねえ」

窪田なら、自分が好きな相手にはそうするんだろうけど。

「でも、そうね。窪田には、縁遠い世界かもね」

窪田は、自分が好きになった相手からは好かれる人生っていうのを歩んできたようだから、そんな台詞が言えるんだろうなあ、嫌味を込めて言う。

「うん。そうだと思う」

はあ。さいですかあ。

「あのさ。……さっき、貴和子たちが話していたあれ、聞かせてあれ？」

「ほら、曜と」

「あ！」

「『あ！』って、はあ？」

「見て見て、窪田！ ほらほら、でっかいお月さま！」

「え？ あ、ほんとうだ」

空には大きくて黄色いまん丸な月が浮んでいた。

「大昔に見たドラマを思い出しちゃう。ああ、なんだっけ、ほら、ドラマと映画が繋がっていて、月が出てくるグロイドラマ」

「『アナザヘヴン』」

「そう、それぞれ！」

あれに出てきた月も、すごく綺麗だった。

恐いくらいに。

そして急に、昔の思い出が蘇ってきた。

「……私さ、窪田。月と手を繋いだことがあるんだ」

そのことを思い出して、くふふと笑う。

「月と？ へえ。聞かせてよ」

窪田が言う。

「昔、昔のその昔。私が小学生だった頃、かな。クラスで休んだ子に帰宅後に学校からのプリントを届けるのをすっかり忘れていて。もう気が付いてから急いで届けに行ったのよ。それがさ、冬だったのかなあ。行くときはまだそんなに暗くなかったんだけどそれでも段々と暗くなってきた。で、プリントを渡して帰ろうとしたら、もうどっぷりと暮れててさ。それが、恐いのなんのって」

私がそう言うと、窪田が眉間に皺を寄せている。

「貴和子の親は？ 若しくは、相手の家の親が帰り道を送ってくれるとかなかったの？」

「私ね、大胆にも親には内緒で出かけたの。だって言ったら怒られるでしょ？ で、届け先の子の家は共働きで、家に大人の人なんていなかったよ」

私がそう言うと、「そっか」と窪田が言った。

「でね、まあ、暗い中帰るわけだけど、ぱっと空を見上げると大き

な大きなお月さまが出ていてさ」

あんな風にね、と窪田に今見えている月を指す。

「誰もいない暗い道だけど、お月さまがいると思うと安心してさ。夜空に向かって手を伸ばしたんだ、こんな風にね」

窪田の前で空の月に手を指す出す。

「そして『ゆかいに歩けば』を歌いながら、こうやってお月さまと手を繋いで、歩いて帰ったってわけ」

そう言いながら、その歌のさびの部分を読んだりしてみせた。

「変な話だけど、その時はさ。すごく遠くにあるお月さまがとても近くに感じられたんだよね」

「変だよな」と私が言うと、窪田は穏やかな笑顔で「全然」と言
って笑ってくれた。

するとふいに流れてきた雲で月が隠れて、月に向かって差し出し
ていた私の手は行き場がないものになってしまった。

そこにぱっと窪田の手が伸びた。

そして私のその手を取った。

窪田は私と手を繋ぐと、二人の手をゆっくりと下ろした。

「僕が代役ってことで」

窪田が言う。

月明かりがない夜。

その窪田の表情は見えない。

そして。

——— 私のも。

いきなり無口になった私を隣に置きながら、窪田は暢気にさつき
私が歌った歌を口笛なんかで吹きだした。

その暢気者の隣で、私は一人パニックになっている。

彼女がいるの男と、こんな風に手を繋いで歩いていいのか。

私が彼女だったら、絶対にこんな嫌だ。

それに、ニイに聞かれて話す窪田の口から「結婚」って単語が出てきたのはついさっきのこと。

結婚、「する」んだろうか？

結婚、「したい」んだろうか？

結婚、「しない」んだろうか？

いずれにせよ、遠いなあ、と思った。

こんな側にいるのに、窪田と私の距離は遠い。

ちえ。

泣けてくる。

月が消えた夜。

月と手を繋いだ。

ほんの少しの涙と一緒に。

6・月明かりが消えた夜（窪田・ニイ・曜・貴和子）

付き合って一年になる彼女から、「結婚することになったの」と告げられた。

左手には、遊園地のチケットが三枚。

「……ゆうえんち、って言ったか？」

平日の朝の七時過ぎだというのに、泥沼から這い上がったばかりのような曜の声が返ってきた。

「うん。昨日さ、会社の人に貰ったんだけどよかったら曜が琴ちゃんに行くかなあと思って」

電話の相手である高校時代の同級生の曜は、早くに結婚して父親になり、そして離婚してしまった男である。

そして琴ちゃんというのは、そんな彼の引き取った可愛い一人娘だ。

「ああ、ゆうえんち、遊園地、かあ。で、どこの遊園地だって？」

頭の回路が繋がってきたのか、曜がそう訊いてきた。

僕はチケットを見ながら、その遊園地の詳しい場所を説明した。

「貰う」

曜がそう答えた。

「じゃ、僕はもう少ししたら会社に行くんで、その途中で曜の家のポストに入れておくから」

少し遠回りにはなるけれど、歩くのは好きなので苦にならなかった。

「ありがとう、窪田」

曜が言う。

曜に「ありがと」なんて言わせてしまおう琴ちゃんパワーはすごいって感動しながら、「どういたしまして」と言って電話をきった。

スーツに着替えて、いつもよりも少し早めに家を出て曜の家まで歩く。

歩きながら、昨夜の彼女の言葉を思い出していた。

——— 「結婚することになったの」

……。

「あ、窪田くんだあ！」

その声とともに、琴ちゃんが転がるように玄関から飛び出してきた。

もう曜の家の前まで来ていたんだって思いながら、父親とは反対に朝から元気な琴ちゃんを見てほえましく思った。

砂糖菓子のように、にこにこしながら琴ちゃんが僕の足元にぴたりとくっついた。

「窪田くん！ 琴に、ゆーえんちの券くれるのほんと？」

琴ちゃんはそう言っていると、わくわくとした顔つきで僕を見上げてきた。

「うん。本当だよ。パパと行きなね」

そう言いながら僕はチケットが入った封筒を出し、その封筒から一枚だけを取り出して琴ちゃんに手渡した。

「あー！ 琴、知っている、知ってる！ ここね、うさぎさんがいるところなの。あのね、琴の友だちのみかちゃんも行ったんだよ」

琴ちゃんはチケットをぎゅっと握りしめると、「パパア！ ゆーえんち、来たよ！」と声を張り上げた。

すると曜の家の扉がゆっくりと開いて、無精ひげを生やした曜がだるそうに玄関から出てきた。

「……よっす」

「おはよう」

昔から変らない曜の挨拶に笑ってしまう。

「はい、これ」

残りの二枚が入った封筒を曜に渡す。

曜が封筒を覗き込み、眉間に皺を寄せる。

「一枚多い」

「あ。うん。三枚貰ったからさ。曜が誰かを誘って行くかなあと。

ほら、お母さんとか、あとは……由梨子ちゃん、とか」

「パパ！　ういこちゃんがいい！」

琴ちゃんが興奮しながらそう言いだした。

「ダメ。由梨子はその日はパン屋さんの仕事」

やけに迅速に曜がそう言い切る。

確かに、土日でも「ういこちゃん」こと由梨子ちゃんのところの

パン屋は（由梨子ちゃんの家はパン屋で、彼女は僕らの同級生であるニイの妹だった）やっていた。

突然、にやりとした顔で曜がこっちを見てくる。

……嫌な予感。

「琴、窪田のおじちゃんが一緒に行ってくれてるって。なあ、窪田」

そう言うと曜は、封筒から一枚だけチケットを取ると、残りの一枚が入ったままの封筒を僕に返してきた。

会社に着くと、「宇田川さん」の結婚話で大盛り上がりだった。

宇田川さんの部署は、このフロアではないのに、それなのにこの話題である。

しかし。

事前に知っていたとはいえ、嫌なものだ。

なぜなら、彼女——宇田川　圭子さんが決めた結婚相手は、僕ではなかったから。

「おはようございます、窪田さん。聞きました？　宇田川さんのこと」

同じシマの山田さんが言いながら伝票を机から出している。「もう驚いたのなんのって。そういえば以前窪田さんは宇田川さんのチームでしたよね。ってことは、宇田川さんとはお仕事一緒にしたことがあるんじゃないかね？」

山田さんはそう言うのと、にこにこしながら伝票をから顔をあげて僕を見てきた。

まさかこの無邪気な山田さんに向かって、一緒に仕事をしただけでなく一緒に寝たこともあります、とは冗談でも言えそうにないの
で、「まあね」と曖昧な返事と笑顔で答えた。

会社では、僕と宇田川さんが付き合っていることを知る人はいなかったし、今となってみると「付き合う」という意味さえもお互いの中で微妙に違っていたのではないかとさえ思えた。

「お相手、同級生さんなんですってね！　長いこと仕事で海外にいたとかで、で、最近再会して、一気にそんな話になったって」

うん、そう。彼女から僕もそう聞いていた。

——— 「ずっと忘れられなくて」

——— 「つい、二ヶ月前に帰国して、会うようになって」

「結婚」の言葉に驚くとともに、そんなことが起きていたことに全く気がつかなかった自分の迂闊さにも驚き。

怒るとか、哀しむとか、そんな感情がわき上がる間もないほどに、一方的な彼女との最後だった。

けれど、こうして第三者である山田さんから同じ話を改めて聞くと、一人の女の人の長い恋が実った、そんな話に聞こえた。

「不思議なもんだね……」

僕がそう言うのと「ほんと、こんな話ってあるんですね」と山田さんは夢見る乙女の顔でそう言った。

その晩、友人であるニイから電話があって「飲もう」って話にな

った。

メンバーは、僕にニイに曜、そして貴和子の同級生仲間だ。集まって飲むのも久しぶりだった。

「聞いてくれよお」

主催者のニイはその権限を使い、自分の恋愛話を始めた。

ニイはなんと、僕らの高校の同級生でニイにとっては幼馴染でもある「向田さん」のことが好きだったようだ。

しかし、あの頃のニイの態度からはそんなことは全く想像もできず、ほんとニイは馬鹿だなあと、貴和子と二人でやじをとばした。でも、馬鹿さ加減でいえば、ニイよりも僕の方が馬鹿かも。

付き合っていた彼女に、あんな告白をされてしまうわけだから。そんなことを思っていたら、今度はニイに突っ込みを入れられた。

おまえは年上の彼女と上手くやっているのかって。

「結婚するって」

正直にニイに話す。

ニイが、ぐほっとむせた。

「……まじ」

ニイの顔が真面目になる。

「ごめん。えっと……」、そう言うときニイはあっちで話している曜と貴和子のことをちらりと見て、「話したくは……ないよな」と言った。

そう言われて、確かにそうだなあと思い「うん」と答えた。

「よし、飲もう！」

そう言うときニイは「おねーさん！ お酒！」と大声でオーダーをした。

「来週な」

遊園地の件で別れ際、曜が言う。

「うん」

そう返事をする、曜は一瞬黙って「おじさん、元気？」と聞いてきた。

「え？ おやじ？ うん。元気だよ」

「たしか……再婚、されたんだっけ」

「うん。もう、七年になるよ」

「そっか。……あのさ」

曜が無精ひげを摩りながら話し出す。

「おまえ、ガキの頃。……淋しかった？」

その台詞は、僕の中にある何かを揺さぶった。

「……さあ」

少し酔いが回った気がして目頭を押さえる。

「ええと……よくは……覚えていない」

そう答えると曜は「そうか」と言っ、丁度会計を済ませて出てきたニイと貴和子に軽く手を上げた。

実母が亡くなったのは小学五年の時だ。

すぐに祖母と一緒に住むようになってはくれたが、どうも何かが違うって。

それからの僕は、毎日のように友だちを家に招き、日が暮れるまで遊んだ。

友達が夕飯まで食べて帰ることも、少なくなかった。

ともかく遊んで、遊んで。そして、笑い転げていた。

中学生になると、側にいるのが「友だち」ではなく「彼女」になった。

女の子の子といると楽しかった。

その柔らかさとか、笑い声は僕を楽しい気持ちにさせた。

恋はいつも、僕の味方だった。

貴和子と歩きながら、唯一恋愛相手にならなかった女の子と、結局一番長く付き合いが続いていることを興味深く思った。

そんな貴和子をちらりと見ながら、「貴和子も十年遅い組だな」って言っていた曜の台詞が気になった。

今日の話の流れだと、貴和子にも誰か好きな奴がいるってことにならなくもない。

その貴和子と、彼女のことがダブリ、女の人には誰にでも忘れられない人がいるんだろうか？　と思った。

そして、誰かと付き合いながらも別の誰かを想うことができるもんなんだろうかと。

そこらへんのこと聞きたいなあと思ったら、貴和子が月の話をしだして。

小学生の頃、暗い道を月を頼りに歩いたって話なのだけれど、その貴和子の小学生の頃の健気さに胸が打たれた。

つまり、そんな強さは僕にはないものだったから。

もし僕が同じ立場だったなら、電話をして翌日の朝に相手の家に届けるという行動をとっただろうし。

もし貴和子と同じように届けたとしても、帰りの暗さに驚き、結局は自分の家族に迎えに来てもらっただろうと思ったし。

一人で暗い道を歩いて帰るなんて、そんなことは考えなかっただろうな、と思った。

なんで、僕がそんなことしなきゃいけないんだ、って思っただろうって。

そう思ったとき。

自分のことが情けなくなった。

なんだよ、そうか、って。

同級生よりも早く大人になったつもりでいたけれど、全く逆じゃないかって。

自分からは歩き出さずに、誰かにそこまできてもらい、そして愛情を貰うばかりだったと。

母を喪ったことから目をそらしつつも、心のどこかでそんな自分の境遇を盾に、そうしてもらえるのが当たり前のように感じていたところがあつたって。

彼女とも大人の恋愛をしているつもりだったけど、そうじゃなかったって。

彼女からの愛情を、当たり前のように受けるばかりで、それだけだったって。

そんな恋愛だったのだと。

こども、だったのだと。

ショックではあったけれど、その事実はストンと心に落ちるものであり。

———「おまえ、ガキの頃。……淋しかった?」

うん、曜。

僕は。

……うん、淋しかったんだ。

そんな僕の隣には、勇ましくも健気な貴和子が歩いていた。

そして小学生の貴和子の手を、今の僕なら握ってあげられたのになあと思った。

月のかわりに、貴和子が家に帰るまで手を繋いであげられるのにと。

僕の前で、貴和子が月と手を繋いだ。

けれど次の瞬間、ふいに流れてきた雲で月が隠れて、月に向かって差し出していた貴和子の手が暗闇で宙ぶらりになった。

貴和子の手を取った。

態度ほど大きくない貴和子の手をそつと握りしめる。

「僕が代役ってことで」

貴和子に言う。

月の明かりがない為、貴和子の顔は見えない。

それをいいことに、貴和子の手を繋ぎさつき貴和子が歌った歌を口笛で吹いてみた。

口笛を吹きながら、ああ、僕は振られたんだなあ、ってことがようやく実感できた。

そして、もうその恋は戻らないんだなあ、ということも。

貴和子の手はあたたかく。

そのあたたかさは、静かな清らかさをもって。

僕の心に降りてきた。

7・心は開いて見られません。（沙希・ニイ・貴和子）

駅前になんかできた美容院に行ったら、なんと隣の席に有島 貴和子さんが座っていた。

「あれ」

有島さんもすぐに私に気がついたようで、こつちを向いてにこりと笑ってきた。

「お久しぶり」

どちらかといえばお互いの家は近い方なんだろうけれど、活動時間や場所が違うのか、こうして会ってしかも言葉を交わすことは今までそうなかった。

有島さんとは、同じ高校だった。

とはいえ、クラスも一緒になったことがなければ、付き合う友だちも違っていた。

接点といえば、ニイってことになる。

「カット？」

有島さんが聞いてくる。

「うん。有島さんは？」

「カットとカラーリング」

さすが。

いや、何をもってさすがって言うのかはあれなんだけど。

「有島さんは、お休み？」

というのも、今日は木曜日で。

しかもなんてことない、フツの木曜日だから。

「うん。有給が余っていたから、使ってしまったおうと」

有給か、有給。へえ。

そこに、私を担当する美容師さんが来て、シャンプー後に頭に巻

いてあったタオルをぱつと外した。

「あ」

有島さんが、声をあげる。

「ん？」

私のことかな？　と思い、有島さんの方を向く。

「そっか、そういえば天然だったんだよね。向田さんの髪の毛」

いつもはくるんとしている髪が、濡れてストレートになっているのを見て、有島さんがそう言った。

「うん。天然」

薄茶で、くるんとしている髪の毛。

「そうだね。ニイが、先生に言っていたもんねえ」

ニイってば、って言いながら有島さんがくすりと笑う。

「ニイが、何？」

有島さんも「ニイ」って呼ぶんだあなんて思いながら、その内容も気になりそう尋ねる。

「え。あれ」

有島さんがびっくりした顔で私を見る。

「知らないってこと、ないよね？」

有島さんが言う。

「多分、知らないと思う」

私の髪の毛のことで、ニイが先生に何かを言ったってことだね。

「そっか。でもさ、今の話の流れで、なんとなく察した？」

有島さんが言う。

「うん。つまり、私の髪についてニイが」

ニイが。

「先生に説明してくれたってことだと解釈したんだけど」

「うん。そう」

有島さんが即答してくる。

私たちの高校は、髪の毛に関してはやたらと厳しいという評判があり、この髪の毛のことで私も入学式の時に一度だけ、そう一度だけ、

先生に注意をされたことはあった。

けれどそれだけで、それ以後は先生から何も言われなかった。だから、私の気持ちの中では「意外と厳しくない」だったんだけど。

そこにニイが絡んでいたとなれば、また話は別だ。

「……なんでだろう」

「ほんと。なんでだろうねえ」

有島さんが言う。

その言葉と同時にタイマーが鳴る。

有島さん担当の美容師さんが来て、髪の染まり具合を確認している。

そんな様子と、私の髪の毛がチョコチョコと切られるのを見ながら、私はニイのことを考えていた。

「向田さん、お茶でもない？」

私が会計に行くと、先に終ってソファに座っていた有島さんがそう声を掛けてきた。

駅から少し歩いたところにある喫茶店に入る。

お店の前はよく通るけれど、入るのは初めてのお店だった。

重そうな木の扉を有島さんが押し開けると、明るい日差しと、珈琲を焙煎したいいい香りが漂ってきた。

珈琲の香りとはともかく、店内が外から見るとよりも明るいのに驚いた。

よく見ると、通りに面していない方の窓が、高くまでとってあった。

入ってみたいとわからないものだなあと思いつつ、お店の人に案内された席についた。

二人分の水が置かれる。

メニューを見ながらうんうんと悩んだあと、私たちはそれぞれに好みの珈琲を頼んだ。

「すごく短く切ったのね」

有島さんが水を一口飲んだあと、そう言った。

そう言う有島さんの髪の毛はつやつやとして、肩の下まであった。

「うん。背が高い方じゃないから、これくらいの方がバランスがいい気がする」

私も水を一口飲んだ。冷えていて、とてもおいしい。

「うん、似合っている。天使みたい」
「は？」

「て、ててて？」

聞き間違いかと思って、有島さんに向かって聞き返す。

有島さんが笑う。

「うん。天使。ニイといると天使と悪魔みたいで、見ていて気の毒……じゃなくて、ほほえましかったわ」

「悪魔」

有島さんの言葉に、思わず吹き出す。

「すごい、有島さん。それってニイにぴったりの表現」

笑いが止まらない。

ふと、有島さんはニイが私に変なこと（世間で言うプロポーズ）をしたのを知っているんだなあと思った。

「あの、ニイってどんな人ですか？」

そう尋ねる私を、有島さんがびっくりした顔で見た。

「……そんな。ニイとなら、私よりも向田さんの方が付き合い長いでしょ？」

「それは、そうだけど」

でも。

う、待て。

こんなこと聞いちゃうのって、あれよね。

なんていうか、ほら、ドラマなんかでよく見る、女の子が「好きな人のこと」をその友だちにあれこれと聞くシーンよ。

おまけに氷まで、効果を狙うかのようにのが「カラン」なんて音をたてて融けちゃうし。

ちょ、ちょっと待ってよ！

「有島さん、ごめんなさい。今した質問は、なしてことで」

私のその言葉に、有島さんの顔色が変わった。

「あ、ごめんなさい、向田さん。私の言い方ってちょっと良くなかったよね。別に私はニイのことを向田さんに言いたくないとかそんなじゃないくて。ただ単に驚いて、ほんと驚いて。まさかそんなことを聞かれるなんて思っていなくて、で、そう言ってしまっただけで」

焦りながらも言葉を繋ぐ有島さんに、私まで焦った物の言い方になってしまう。

「え、今のは、今のはね、有島さんがどうのってことじゃなくて、私が――」

「ニイね。うん、ニイ。ニイがどんな奴かってことよね。あいつはね、一言でいえばバカな奴よ」

……バカな奴。

「つまり、ええと。嘘をつくのもあれだから正直に言うけれど。ニイから聞いたのよ、向田さんのことを好きだってこと。しかも、それは昔っからそうだったって。それを聞いて、私と窪田で。あ、向田さんは窪田って覚えているかな？ まあ、そういう男がいるんだけど、窪田と二人で散々ニイにバカだ、バカだって言ったのよ。で、私はニイみたいな愛情表現は不毛だと。迷惑だって言ったの」

「……そう。そう、だよ。そうよ。そうなのよ。有島さんもそう思う？ ニイったらね、私がニイの気持ちに全く気が付いてないこ

とを知って、『どアホ』って言ったのよ。アホだけでも酷いのに、『ど』までつけて」

一気に言う。

有島さんが、あちゃーと言っておでこに手を当てた。

そのリアクションに、「私は間違っていない」って勇気づけられた気がして、再び喋り出す。

「もうね、昔っから、ニイは私が白と言えば黒。右と言えば左って、わざとしか思えないくらい違う意見を言ってきた。しかも、憎たらしいことに大抵ニイの意見が通っちゃって。あゝ思い出しても腹が立つ。だから、そんなだったから、ニイがそんな風に私のことを想ってくれていたなんて、思いもしなかったのよ」

「ふーん。なるほど。想ってくれていたなんて、思いもしなかったんだ」

「あの。……その言葉を繰り返されると」

なんて言いますか。

「へへ。意地悪でしょ」

「少し」

うろう、と唸りながら有島さんを見た。

有島さんは、コップがテーブルに作った水滴を細い指先で、つーと延ばした。その指先に目が行く。

「あのね。向田さんには、ニイへの長年の複雑な感情があるってことを承知の上で言わせてもらおうと」

そう言う和有島さんは、その指を机から離しけるとさせて、私の胸あたりを指してきた。

「想いが重なった相手がいるんだから、その相手を失わないようにどんなチャンスでも生かしたほうがいいと私は思うなあ」

言われてしまった。

ニイから嫌われていたわけじゃなかったってことを知った瞬間に感じた、心の奥の奥にあった小さな小さな硬い石ころがすっと消えていくような感覚を、私は有島さんには見透かされているんだと思った。

それくらい、有島さんの言葉はびびつと胸に響いた。

難癖つけてニイから逃げているけれど、そうすることで私はニイの気持ちを試していたのだ。

そして、いじめたい気持ちもあった。

だって、私はずっとニイに嫌われているって思っていたから。だから、今度は自分の番だって思った。

大人げない。

全然、天使なんかじゃない。

「ニイ、怒っているかな」

私がそう言う和有島さんは、「それは、私にはわからないなあ」と言ってしまうせぶりな仕草で頬杖をついた。

有島さんと別れたあと、私はニイのお店へと向かった。

塀の上で昼寝をしている猫。

公園でゲートボールをしているお年寄り。

そして、近くの学校からは、子どもたちの歓声。

そんな、いつもの馴染んだ景色に背中を押されるように、私は歩

いていた。

お店に近づくにつれ、速足になっていることに気がつく。
気持ち、怖いくらいまっすぐに、ニイに向かっていることを感じる。

なんて、遠回りだったんだろう、私たち。

お店の中で、ニイの妹の由梨子ちゃんが接客をしている様子が見えた。

そして、ニイがいつもの通り――
いつもの通りに、厨房から焼き上がった世界一おいしいパンをトレイに載せて出てくるのも。

私に気がついたニイが、驚いたような顔でこっちを見た。
そして、怒ったような照れたような顔して、笑った。

8・人の恋路はよくわかる（貴和子・窪田・曜）

珍しくも、曜からの電話である。

「ゆ、ゆうえんち？」

ゆうえんちって、遊園地のことだろうかと曜に聞くと、「そう」なんて短い答えが返ってきた。

電話の相手は、高校の同級生の曜。

そしてこの曜という男は、日本一遊園地の似合わない奴でもある。

その曜に、今度の土曜日に愛娘の琴ちゃんを遊園地に連れて行って欲しいと、私は「頼まれた」のである。

そう、曜が「頼んでいる」のだ。

この貴和子サマに。

これは、曜が電話を私にかけてくる以上に珍しいことである。

「ほほほ。了解」

こんな珍しい状況に乗らない手はない。

「助かる」

そう言うとき受話器の向こう側で、曜のほっとしたような溜め息が聞こえた。

曜の話によると、急に仕事を立て込んできて、どうにもこうにも琴ちゃんと約束したその日に遊園地に行けなくなってしまったらしい。

別の日にと考えたところ、チケットの有効期限もあるようで。

曜は離婚して一人で（と言っても、曜の両親の力を多く借りながらだけれど）、琴ちゃんを育てている。

人っていうのは分らないものだ。

高校の時の曜からは、将来こいつが子どもを引き取って育てるなんて姿は、想像できなかったことだったから。

あの頃、私は曜とニイと窪田とつるむことが多かったけれど、その中にいても曜はひっそりと孤立しているというか、一緒にいるのに一緒にいないかのような雰囲気醸し出す男だった。

誰かの面倒を見るなんて、全くもって思考回路にないような。

それが今では評判の（ニイ談）いいパパっぷりを発揮している（ちょっと大げさな表現かな）らしいから、大したものだ。

おや、でも。

「あのさ、私でいいの？　ほら、ニイんとこの妹は琴ちゃんと仲がいいって」

ニイの妹で、パン屋さんの看板娘の由梨子ちゃんは琴ちゃんと仲良しさんなのだ。

ついでに言うと、曜も。

昔から、あいつは何かと由梨子ちゃんにちょっかいを出していた（主に毒舌系で）。

ニイの口から彼女の話が出るとき、なんとなく曜の表情が柔らかくなっていったのを私は知っていた。

だから、私はてっきり奴が好きなのはあの子なのだと思っていたのだ。

そんな曜が、何の前触れもなく駆け落ちのように他の人と結婚して街を出ていった時はびっくりしたし、結局離婚して琴ちゃん連れて地元に戻って来た時には、今度こそ由梨子ちゃんとかつくんだろうなと思っていた。

なのに、今現在、そんな話は一ミリもない。

ニイの重い口をじりじりとこじ開けなんとか聞き出したところによると、以前よりも寧ろマイナスな関係になっているとか、いないとか。

全く、あんたたちはどうなっているのよって言葉はぐっと盲腸あたりにしまいこみながら、曜の反応を待つ。

「……なんだよ。どいつもこいつも」

イラッとした曜の声が受話器の向こうからした。

それを聞いて、私は「おおっ」って思った。

曜が、私のちょっとした言葉さえ無視できないほどに、追い込まれているんだって感じたから。

気持ちの矢印が向かい合っているのなら、くっつけよおまえら、
って思うわよ。ホント。

「あ、そうそう、貴和子。窪田も一緒だから」
曜の言葉に、はっとする。

「は？」

何に、窪田も一緒だって曜は言った？

「遊園地。琴と貴和子と窪田の三人でヨロシク」
そう言うと、曜はこっちの返事も待たずに電話をきった。

ほんと、人の恋路はよく分る……。

あああ、もうっつ！

曜やつ、やってくれるじゃないのさ。

で、当日、何を着ていこう。

9・恋は思案の外 その1（貴和子・窪田・曜）（前書き）

「恋は思案の外」は貴和子と窪田の物語で、全6話です。

9・恋は思案の外 その1（貴和子・窪田・曜）

恋は常識では律しきれない。

あちこちにある段ボールの山をよけながら台所までたどり着くと、案の定母から「ところで住むところは決まったの？」なんてアイタタな台詞をいただく。

そろそろどこかに決めないといけないのは分かっているけれど、曜から頼まれたミツシヨンにかこつけて今日も現実逃避の私だった。

歩きながら、おかしいところはないよねえなんて今更の服装確認をする。

こんなこと「らしくない」と思うけど、そもそもこんな状況は初めてなので、実は「らしい」とも思う。

窪田と出かけるのはこれが初めてってわけじゃないけれど、休日にこんなお出かけめいたことは実は初めて。

しかも、遊園地ですと。

昨夜全く洋服が決まらず、部屋中絹の海にしたまま出てきたのは、人生初の事。

「よっす」

待ち合わせ場所である曜の家に行くと、曜がちょうど玄関から出て来たところだった。

「おはよ」

寝不足気味な私を見て、曜はお見通しってな顔でふふんっと見下

ろしてくる。

朝から凄くむかつくんですけど。

「で、琴ちゃんは？」

私がそう聞くと、今度は曜が顔をしかめ、「窪田とニイんところ」と言った。

「ニイ？ パン？」

私たちと同級生のニイはパン屋さんだ。

私のその言葉に、曜は曖昧な頷き方をする。

「ふーん」

逆襲とばかりに、私も半眼になって曜を見る。

ニイの妹で、パン屋さんの看板娘の由梨子ちゃんは、琴ちゃんと仲良しさんだった。

で、私が思うに曜も。

どーいうわけか、ご本人サマはそう認めたがらないようだけど。けっ、ってなもんよ。

人生無駄遣いしているよね、こいつ。

「ところで、住む場所決めたか？」

「ん。まだ、です」

「そっ」

「あ、あんたねえ。人に聞いておきながらその興味のなさそうな受け答えはないんじゃないの。だいたい曜は――」

「パパア！」

私たちの不穏な空気をぱっと晴らすかのような、甘く軽やかな琴ちゃんの声が響く。

そんな琴ちゃんにむかい、曜が骨ばった手をあげた。

琴ちゃんも曜にぶんぶんと勢いよく手を振っている。

曜。パパ、しているなあ。

その琴ちゃんの隣には、窪田がいた。

窪田。

うーん。朝からずるい位にいい男。

軽く眩暈。

そのカッコイイ姿を見ていると、好きというよりも憎らしくなってくる。

この私の、貴和子さまの覇気のない姿を見よってな感じで。

「貴和子、おはよう」

窪田の邪気のない笑顔が眩しい。

「あ。お、おは、よう」

そんな私の様子を見て、曜の目が思わせぶりに大きくなった。

「ヨロシク頼むな」って、全然頼むなんて思っていないような曜のお願いに頷きながら、三人で歩き出す。

こわごとと琴ちゃんのマシユマロみたいな手を繋ぐと、彼女は私の手をしっかりと握り返してきた。

途端に、可愛い、って思いがお腹の中から熱く沸きあがってきた。

もしや、これって母性？

思いがけない感情にじーんとなる私のそばでは、窪田と琴ちゃんが遊園地のこととかそこで乗り物のことなんかをあれこれと話し始めていた。

「窪田くん。あのね、琴ね、その遊園地行くの初めてなんだ」

琴ちゃんがえへへって笑いながら言う。

「そうなんだ。僕も小さい頃に行ったきりだな」

窪田が言う。

「ねえ、ねえ。じゃ、貴和子ちゃんは？」

琴ちゃんがにこにこしながら聞いてくる。

貴和子ちゃん。

小さい頃呼ばれていたその呼び名に、照れくさくなる。

「そうそう、貴和子ちゃんは？」

窪田までにここにこしながらそんな風に私の名を呼んだ。

お、おまえっ。

「わ、私は。遊園地は、初めてかなあ」

「え」

琴ちゃんと窪田が同じような声を出して驚く。

「ほらほら、みなさん。電車の切符を買わないと」

話題を逸らそうと券売機に向かう。

「あ、切符か。俺、パスモあるからいいや」

窪田が言う。

「パスモねえ。そーいえば、私もあるし」

「もしかして、琴ちゃんって子ども料金もいらないんじゃないの？」

「無料ですかい？ な、なんと」

一応駅で確認をし確かに無料だと知り驚愕した後、私たちは電車に乗った。

窪田と私の間に琴ちゃんを座らせる。

電車の中で子どもとどうやって遊べばいいんだろうって思ったら、琴ちゃんが私と窪田に両手を出せと言ってきた。

窪田と顔を見合わせて、大人しく両手を出すと、琴ちゃんが片方の手の人差し指を私たちの手の甲につけながら「おせんべ焼けたかな」と言いだした。

はいはい、やりました。小さい頃に。

私のところで琴ちゃんの指先が止まったので、手をくるっとひっくり返し、手の平を向けた。

琴ちゃんがケラケラと笑う。

窪田は「へえ」ってな顔して、同じように琴ちゃんの指が止まると手の平を返した。

それを一通りやったところで、乗り換えの駅が来た。

ホームを見ると、結構な人がいた。

あの中、琴ちゃんを歩かせて大丈夫なんだろうかって思っていたら「琴ちゃん」と窪田は琴ちゃんに両手を差し出し、彼女をさっと抱っこした。

そして「貴和子」って私の名前も呼び、彼の後ろに来るようにと目配せをしてきた。

いきなり鼻血ものの展開に、不覚にも曜に感謝をしてしまった私でありました。

遊園地に着くと、いきなりうさぎとか熊の着ぐるみが登場して、入場してくる子どもたちと写真を撮っていた。

「琴ちゃんも撮る？」

窪田がそう聞くと琴ちゃんはきよろきよろしたあと、お目当ての着ぐるみを指して「撮って」と窪田に言った。

驚いたことに窪田はデジカメも持ってきていたようで、二人して着ぐるみ目指して歩き出していた。

メルヘンなその世界に、私も遅れないようにと二人のあとを歩いた。

遊園地と縁がなかった私なので、あれこれが珍しく「へえ」なんて思いできよろきよろした。

轟音とともに、叫び声が聞こえたかと思うと、視界の中で鮮やかな色をしたコースターがくると一回転した。

鳥肌がぞわっと立つ。

「ねえ、ちよっとちよっと」

そばにいた窪田に声をかける。

「まさか、あれには乗らないわよね」

絶叫系マシーンを指す。

「身長制限があるしね。乗らないよ」

「身長？」

「うん。身長が何センチ以上じゃないとああいうのには乗れないんだよね。……貴和子ってさ」

窪田がまじまじと人の顔を見ってくる。

「本当に遊園地に来たことないんだね」

「うん。記憶にある中ではない」

「乗り物がダメ？」

「ダメ」

「そいつは、知らなかった」

長い付き合いなのにねえと窪田がしみじみと言う。

「あれ？ でもさ、卒業したあとにみんなで行かなかったっけ」

クラスの有志でさあ、と窪田が言う。

「ああ、そんなこともあったっけね」

「貴和子は、来なかったっけ？」

「まあね」

私は行かなかった。

当時の窪田の彼女に思いっきり牽制されたのだ。

まあそもそも、最初から行こうなんては、思っていなかったけどさ。

その頃、窪田はクラスメイトである井波さんと付き合っていた。

彼女は高三で編入してきた帰国子女で、年は私たちよりも一つ上だった。

最初はクラスに馴染めないように思えた彼女だったけれど、気がつくとも、いつも窪田の隣にいた。

二人とも志望学部が同じということもあり、ウマが合ったようで、見ているこっちが恥ずかしくなる程の熱々ぶりだった。

今までも窪田は、彼女がいようと関係なく、曜やニイそして私とつるんでいた。

そんな姿を散々見てきた他の人たちとは違い、そのことに全く免疫のない井波さんは、ことあるごとに私にちくちくと言ってきた。

貴和子は女として見られていないって、彼女の周りの人は言っていたようなんだけど効果はなく。

まあ、確かに私だって逆の立場だったらむかつくよね、と思い、意識して学校では窪田にこちらからは接触しないように努め過ごしていたわけだけど。

運命とは残酷なもので、二人の第一希望の学部には窪田は受かり、井波さんはまさかの不合格で、何の因果か、私は窪田と同じ大学の違う学部で合格した。

そこがちよつとやっかいだった。

井波さんは、私と窪田が実は付き合っていて、示し合わせて受験したのではないかと言ってきたのだ。

困ったなあと思いつつも、自分が受験した大学名を一々と挙げてこれこれこういった事情でこうなったんだと説明をした。

理解してくれたんだかそうでないかは不明なまま、今度は卒業記念として行くことになった遊園地にも、はつきりと来てくれるなど言われた。

そんなことを言われるのは勿論嫌だったけれど、その窪田へのまっすぐな想いにすごいなあと感心した私でもあり。

全部、窪田は知らないことなんだろうけど。

そんなわけで、遊園地へは、早々に欠席って答えていた。

不必要な争いは無意味なもの。

大学に入学して間もないころ、うちの大学のキャンパスで井波さんを何度か見かけた。

かなり遠目だったにも関わらず、お互い相手を認識できちゃったのは、それなりに私たちの間に緊張感があったからなんだ思った。

私は窪田を好きだったし、でも窪田の彼女は井波さんなわけであり。

ともかく彼女の怒りに触れないようにと、こっちから窪田への接触は引き続き一切しなかった。

ある時、ニイと曜との三人で久しぶりに集まろうってことになった。

窪田が来ないって場合は、たいていおデートなわけで、わざわざその理由を聞くほど野暮な私でもなかった。

集合場所のお店に入ろうとした瞬間、ぱっと腕を掴まれた。

その冷たく細い指には鳥肌が立つほどで、振り向くと案の定というか、井波さんがいた。

「いい加減にしてよ」

きれいな顔で井波さんが私を睨んできた。

やばいなあ、どうしよう、なんて答えれば彼女の怒りを助長せずに済むだろうかなんて意外にも冷静な気持で私は彼女を眺めた。

しかし、それがよくなかったようで、「偉そうな顔して」なんて井波さんの言葉が飛んできた。

困った。窪田はどこよ、なんて目が泳いでしまう。

窪田のことを好きな女の子にあれこれ言われるのは初めてってわけでもないけれど、ちょっと井波さんは特別にやっかいだなあと思った。

いい加減にして、と言われても、どうしろっていうのでしょうか。

まあ、窪田を好きでいることが悪なんだって言われたら、それはそうなんだろうけど。

「貴和子に何か？」

背後から、曜の声がした。

「山口君」

井波さんが曜を見て怯んでいる。

曜もね、悪い奴ではないんですけど、ちょっととつつきにくい雰囲気がある奴ではある。

特に、窪田みたいに人当たりのいい人物と好んでお付き合いしている井波さんにとっては。

「何か？」

曜の言葉に、井波さんが私の手を離す。

「窪田君が」

「窪田が、なに？」

「だから、有島さんが」

「こいつが、なに？」

「だから」

曜と井波さんのやりとりを聞いていると、井波さんが気の毒になつてきた。

「井波さん、あのね。何を誤解しているのか知らないけれど、私は曜と付き合っているし」

そういつて、曜の腕に自分の腕をからめる。

「ね、曜」

私がそう言つて見上げると、曜はアホかってな眼差しで私を見下ろしてきたけれど、ありがたいことに否定はしなかった。

納得させられるとは思っていないけれど、ここであれこれと私たちで窪田の話をするのは違うと思うし、二人は恋人同士なんだから二人で話すべきだと思うし。

「じゃ、私たちこれからご飯を食べるので。ごめんなさいね」

曜の腕を掴んだまま、お店へと入っていくと、「すげーもん見ちゃったぜ、ボク」なんてニイが冷やかすような顔で私を見てきた。

そのうち、キャンパスでも井波さんを見かけなくなり、私の前にも井波さんは現れることもなく、あの二人は終わったんだろうなつてぼんやりと思っていた。

かといって、私と窪田がどうなるってわけでもなく、曜やニイと一緒に窪田の友達として相変わらずの距離でのお付き合いだった。

さつき電車の窓から時折見えた、アパートに掲げられた「REN T」の文字。

これからは、今よりももっとそのお付き合いは、薄くなるんだろうなって思った。

まあ、細く長くってというのが、友達ってものだもんね。

「貴和子も乗る？」

回転木馬を指して窪田が言う。

「私はいいや。窪田は乗れば？」

「うーん。そうだなあ、じゃ、貴和子に写真を頼んでもいい？」
「了解」

丁度前の回が終わったようで、琴ちゃんと窪田は並ばずに木馬へと向かった。

窪田が琴ちゃんを木馬に乗せてベルトをすると、彼はそのまま琴ちゃんの木馬のそばに立っていた。

琴ちゃんが落ちないようにそうしているんだって気がついた私は、なんだか胸が熱くなった。

そうなんだよね、窪田は。

ちよっとしたことについて、さりげなく優しい。

そして、女の子を、女の子として扱ってくれる。

そんなところに一々気がついちゃう私はまだまだ当分、窪田のことが好きなのをやめられないんだろうなあ。

木馬が動き出す。

私はデジカメをかまえながら、手を振り、シャッターチャンスがうかがう。

何度も何度も、木馬に乗った琴ちゃんと窪田が私の前を通る。

二人は私の前を通り。

私はシャッターを押す。

私は見ているだけ。

そう。

常に傍観者だ。

昼食をとるために、遊園地にあるカフェテリアに行った。

琴ちゃんが食べるお子さまランチに、私と窪田は「おおお！」と声をあげた。

本物のお子さまランチを見るのは、久しぶりだったから。

そんな私たちの視線は、琴ちゃんをますます元気にさせたようだ。

内心、曜パパがなくて琴ちゃんは大丈夫なのかなって思っていたけれど、こちらの心配なんか不要なほど、琴ちゃんはお子さまながらも自立しているんじゃないかって思った。

曜の血を引く娘さんなんだあと、変な話だけど、今初めて琴ちゃんと曜の繋がりを私は感じた。

コーヒーカップに観覧車。

その後はいくつか私も一緒に乗り物にのった。

次に琴ちゃんは、電動で移動するぬいぐるみに乗りたいと言った。

窪田が琴ちゃんを抱きあげて乗せると、それはゆっくりと動き出した。

デジカメを構えていた窪田がふいに、「貴和子はさあ」なんて言うてきた。

「なあに？」と聞くと、琴ちゃんに向けてのシャッター音がした。

「曜とはどうなっているの」

「曜と？」

曜と。

浮かんだのは不動産情報のこと。

そっち関係に明るい曜に、今回の引っ越しの事で相談していたの

は事実。

窪田もそのことを曜から聞いていたんだって思った。

「なかなか上手くないんだよね」

この年まで実家でぬくぬくと暮らしてきたので、いざ一人暮らしとなると経済的な折り合いを含めその一歩が踏み出せないのだ。

そういえば、窪田は働き始めてすぐに実家を出て一人暮らしをしていた。

場所は実家のそばなんだけど。

「そういえば、窪田はどうだったの？」

「俺？ ああ。まあ、結婚するんだよね」

……あのお、窪田くん。

私はそんな答えが返ってくる質問をした覚えはないんですけど。いやしかし、結婚、とな。

やっぱりですか。がつくりですなあ。

「で、いつ頃？」

声が震えていますようにと祈りつつ訊きながら、窪田におめでとの一言も言えなかった自分に愕然とした。

いつか来ることだと思っではいたけれど、実際来るともうダメになっている私。

「いつ頃かって？ うーん。さあ」

「さあって。あんた」

「あ、終わったみたいだ」

窪田が琴ちゃんへと歩き出す。

見るとさっきまでゆっくりと動いていたぬいぐるみが止まっていた、琴ちゃんが手を振っている。

私も窪田のあとをついて、歩き出した。

帰る前の一休みってことで、遊園地の売店で私と琴ちゃんはソフトクリーム、窪田はアイスコーヒーを買った。

ソフトクリームはおしゃれにも、スタンドに立てられていた。

「あ、そうだ！ おやつ、あったんだ」

琴ちゃんはパチンと手をたたくと、背負っていた小さなリュックを
ごそごそといじりだした。

「これ、琴の好きなドーナッツ」

ビニールと紙でできた横長の小さな袋に、これまた小さなまんま
るなドーナッツがいくつか入っていた。

「窪田くんと一緒に買ったんだよね」

琴ちゃんが窪田を見てにっこり笑う。

「おいしそうだね」って私が言うと、琴ちゃんは小さなマシュマロ
な手で袋を上手に開けて「あげる」と袋を差し出してきた。

「え、いいの？」といいつつ、既に手が出ている私。

実は、私もニイのこのこのドーナッツのファンだったのだ。

私が一個取ると、琴ちゃんは満足げに今度は窪田にも勧め出した。

窪田はお礼を言うと、わざとのように大きな口を開けて、ドーナ
ッツをぱくくと食べた。

その様子にますます琴ちゃんはお満悦。

「あのね、いつもね、琴がアイスを食べているとね」

琴ちゃんは、ふふふと笑う。

「パパねえ、がぶって大きな口で食べちゃうんだよ」

怪獣みたいだよ、って琴ちゃんが言う。

「貴和子ちゃんも貴和子ちゃんのパパに、アイス食べられちゃう？」

琴ちゃんがガオオーって言いながら嬉しそうに聞いてくる。

「私はパパになんかあげないよ。アイスをあげちゃうなんてさ、琴
ちゃんは優しいんだよ」

それに怪獣は私だし、って、ガオオーって琴ちゃんに言うと琴ち
ゃんが笑った。

かわいいなあ、琴ちゃん。

かわいいから、曜があんなに大事にするのか。

それとも、大事にされるからかわいくなったのか。

私も、誰かに大事にされたいなあ、と思うとため息が出た。ちらりと窪田を見る。

結婚しちゃいますか、ついに。

さようですか。

「あ、そうだそうだ」

琴ちゃんがおばさんみたいに手をパチンパチンと叩くので何事かと思ったら、興味は突然ソフトクリームに移ったようで、「わあ、アイスが大変だあ」とスタンドのままソフトクリームを舐めだした。

おやおやっとな感じで、窪田と顔を見合わせて笑ったところ、「貴和子ちゃんはどこにお引っ越しするの？」と琴ちゃんが私に訊いてきた。

10・恋は思案の外 その2

「え？」

窪田が驚いたような声をあげた。

見ると、アイスコーヒーのカップがまさに口につく手前で、窪田の手が止まっていた。

そして、「なんの話？」と言うと、窪田はカップをテーブルにゆつくりと置いた。

「え？」

こっちもその窪田の言葉に驚きながら、琴ちゃんじゃないけれど垂れそうになったソフトクリームをこれまたスタンドに立てたまま舐めた。

おいしい。

「貴和子が、引越すの？」

窪田の言葉に、今度は私と琴ちゃん顔を見合わせる。

「だから、さっきその話をしたでしょ」

本格的にソフトクリームを舐めようと、コーンを持ち上げる。

すると失礼にも窪田は、私からソフトクリームを取り上げるとそれを再びスタンドに戻した。

「ちょっと、とけるってば」

スタンドに手を伸ばすと、窪田はそれをテーブルの私の手の届かない場所にすつと置いた。

あんまりのことにびっくりして、伸ばした手さえかたまる。

「窪田くん、アイス食べたいの？」

琴ちゃんののんびりとした声に窪田は、「うん。貴和子ちゃんのと交換するんだ」といって、話のつじつま合わせのように自分のアイスコーヒーのカップを私に押しつけてきた。

いや、いらないし、アイスコーヒー。返せて、私のソフトクリ

ーム。

きつと曜やニイに同じことをされたら、そんな風に簡単に言葉がポンポンと出るんだろうけれど、窪田って男がこんなばかばかしいことをしてくるなんて予想外だから、言葉が何も出てこない。

だから仕方なく、私は伸ばした手で飲みたくもないアイスコーヒ―を掴むと、それをごくごく飲んだのだった。

なんなのよ、窪田。

「琴ちゃん、貴和子ちゃんの引越しはパパから聞いたの？」

窪田が優しい顔で琴ちゃんに聞く。

「うん。パパがね、貴和子ちゃんはおうち探しているってね。でね、パパね、お仕事の人にも訊いてたんだよ」

曜は建築関係の仕事をしているから家探しの相談を試みたんだけど、そっか仕事の人にも訊いてくれたんだ。

いい奴だなあ、曜。

「そうなんだ。曜には、相談したんだ」

へえ、って言いながら窪田がソフトクリームをがぶりと食べた。

私のソフトクリームに対してその尊厳も感じられない食べ方はなんじゃない、と窪田をじろりと見たけれど、窪田は私の視線など気にするでもなくとけそうなクリームにも構わず、私の大事な大事なソフトクリームを無作法にもぼくぼくと食べ進め、更にはコーンまでガシガシと食べた。

「窪田くん、怪獣だ！　パパみたい！」

琴ちゃんは、また手をパチンパチンと叩きながら笑った。

もしかして、この手を叩くのって、曜のおじさんかお婆さんの真似なのかな。

琴ちゃんってこういうった仕草が、微妙にシルバー印。

「パパみたい、かあ」

「うん、パパみたい」

妙な雰囲気を感じているのは私だけみたいで、その他のお二人様

は、へらへらと笑いだした。

「窪田、はい」

アイスコーヒーの残りを窪田に戻す。

「もう。ソフトクリームが食べたいんなら、人を横取りせずに自分で買いなさいよ」

窪田は私の差し出したアイスコーヒーを受け取ると、じっと人の顔を見て「今度からはそうする」と言った。

行きと同じように電車の中で手遊びでもするのかなあと思ったら、琴ちゃんは電車が動いてしばらくするとコクコクと船をこぎだした。

あらら、と思い揺れる琴ちゃんの頭を押さえると、琴ちゃんは頭や額に汗をかいていた。

うわあ、おこさまっば凄く汗をかくんだ。

いやはや、驚いた。

私はそっと琴ちゃんの頭を押さえながら、反対の手でカバンからハンドタオルを出した。

そして、ゆっくりと琴ちゃんの額の汗を押さえ拭いてから、そのまま腕を琴ちゃんにまわした。

腕が琴ちゃんの首の後ろに触れた時にそこにも汗を感じたので、やややと思っただけれど、あまり動かして琴ちゃんが起きてもなあと思いい、とりあえず首の前だけ拭いた。

これで、とりあえずはいいのかなあと腕の中の琴ちゃんを見下ろす。

「寝ちゃったね」

琴ちゃんの向こうにいる窪田が言う。

「うん。寝ちゃったねえ」

腕の中で琴ちゃんの胸が上下するのを感じ、小さいなあと思った。

「凄いよね、曜って」、と私が言うと窪田は「ん？」って顔をした。

「だってさ、命を育てているわけでしょ。人が人を育てるって、凄くない？　だってさ、琴ちゃんは曜って存在がいないと死んじゃうわけでしょ。まあ、死んじゃうは大げさかなあ、ん。でも、大袈裟じゃないのかな。琴ちゃんってさ、凄く、曜っていうか、パパっていうか、親っていうのかなあ、そんな存在に対してひたむきじゃない。信じているっていうのかなあ。私さ、そんな琴ちゃんを見ていたら可愛いなあって気持ちと同時に切なくなっちゃったよ。あと少し怖さも感じたかなあ。こんな小さな子にそんな思いで見つめらるなんて、私にはできるかなって。曜みたいに、命を受け止めて守ることができるのかなあって」

おこさまと縁がなかったため、こんな過ごし方は人生で初めての新鮮体験だった。

それを、今日同じ体験をした窪田と共有したくて、つい熱弁をふるってしまったのだ。

考えたことなかったもんなあ。

子どものいる生活なんて。

「守る、かあ」

窪田が、琴ちゃんを見て微笑んだあと、少し考えたような顔をした。

「守れるよ」

窪田が言う。

その迷いのない言葉に、胸が痛くなる。

窪田は話の流れで「貴和子にも守れるよ」、って言ってくれたのだろうけれど、私には窪田が「僕には大切な誰かを守ることができるよ」、と聞こえてしまったから。

重症です。私。

まあ、窪田は、結婚するんだから。

だからそのことを知る私には、そう聞こえてもしようがないじゃないって開き直りながらも、胸が冷や冷やとして苦しくなった。急いで誤魔化すように琴ちゃんの顔を見た。琴ちゃんをよく眠っている。

「守れるよ、貴和子のこと」

琴ちゃんを見ている私の後頭部に、そんな窪田の声が響いた。

今のは、空耳？

「はい？」って窪田のことを見たのと、窪田が「あ、乗り換えだ」って言ったのが重なって、今の発言はうやむやなまま窪田は寝ている琴ちゃんを抱き上げた。

琴ちゃんは寝ぼけているのか、窪田が抱っこしたら少し泣いた。

窪田が手の平で琴ちゃんの背中をとんとんと摩ると、琴ちゃんは再び静かになった。

「あのさ、窪田っておこさまをあやした経験ありの人？」

出口に並んで立った窪田にそう訊くと「全く」と窪田は答えた。

ってことは、あのあやしかたは……。

ちよっと想像を富士山なみに働かせた私は一人で落ち込んでしまった。

琴ちゃんはそのまま眠ってしまい、次の電車の中では窪田は琴ちゃんを抱っこしたまま座った。

窪田の隣に座って、そっと琴ちゃんの靴を脱がす。

なんという、スモールサイズ！

靴に驚きながらも、窪田にハンドタオルを見せて、「いる？」と訊いた。

窪田は頷くと、琴ちゃんの首と窪田の腕の間にタオルを差し入れた。

やっぱりそこは、汗ポイントだよ。うんうん。

ふと、前を見ると、同じように眠った子どもを抱っこするママさんがいた。

目が合ってしまった、お互い微笑んでしまった。

まあ、私はなんちゃてママさんなのですが。

でも、琴ちゃんが存在がなければ、むかいの席の女の人も微笑みあうこともなかったんだなあと思うと、おこさまの威力を感じた。

お子さまかあ、と思う。

曜は、パパだし。

窪田も結婚するというし。

ん！　そういえば、ニイもそろそろ？

……あ、あれ。

今までニイや窪田も同じようにのほほんとしていたから、こっちも暢気に構えていたけれど。

もしや、私は出遅れてしまったのではないだろうか。

猛・反・省。

けれど、今まで女友だちが結婚すると聞いても何とも思わなかった私が、今日琴ちゃんと過ごしたことで「お子さま」について考え、熱くなるってことは。

もしかしたらキテいるってことなのかもしれない。

私の中の適齢期ってやつが。

—— 適齢期。

来るのは構わないけど、この状態でこられても困るって。

相手、いないし。私の場合は、そこからだし。

つまりが。

「合コン？」

それはあまりに短絡的だろう。

いや、待って。

そんな悠長なと言える私か？

むしろ、合コンなどと言っている場合ではないのかもしれない。

それよりも、より結婚へと近いアクションが必要なんじゃないだろうか。

つまりが。

「婚活？」

うわぁ、現実的。

「貴和子さぁ、声に出ているよ」

「は？」

窪田がため息をつく。

「合コンとか婚活とか」

「こ、これは失礼」

はぁ。

むむむ。今更ながらですが、私って、家もなけりや、彼氏もないのね。

……仕事、頑張ろう。

「合コン、するの？」

「あらま。誰か、紹介してくれるの？」

「えっ？」

窪田が驚いた顔をしている。

「何よ」

「いやぁ。貴和子にそんなこと頼まれたのって初めてだなあと思って」

「……そう」

そうかもしれない。

でも、そりゃ、そうでしょ。

どうして惚れた相手に男を紹介してもらわんといかんかね、キミ。

でもさ。

もう窪田も既婚者予備軍なわけだし。

私だって既婚者を想っているほど、アホではない。
というか、アホになりたくないっていうのが正解。

それにさ、窪田なら案外と。

「ならさ、誰か紹介してよ。窪田なら信用できるし」

「信用、されるのは嬉しいけれど。……誰もいないよ、紹介できる男なんて」

「ふーん。そう」

意外と、けちな窪田。

おまえさんには、友の幸せを願う気持ちが足りないな。

「貴和子」

窪田が呼ぶので、なんだろうって窪田の顔を見た。

なのにこいつってば、人の名前を呼んでおきながら、こっち見てないし。

「引っ越して、なんで？」

「はあ？」

「だから、どうして引っ越すのさ」

「え。あれれ？ え？ もしかして、窪田。知らない？」

私がそう言うのと窪田が珍しく不機嫌そうな声で、「知らないも何も、何も訊いてないし」と言う。

ああ、だからソフトクリームを食べるときに（正確に言うと、私が食べそこなったときだが）、驚いていたのか。

あれ、でもその前には曜の名前を出して、私に「どうなっているの」って 訊いてきたよね。

てつきりそれは、引っ越しの事だって解釈しちゃったんだけど……。

ってことは、あれは何だったんだろう。

「曜からも、ニイからも、貴和子からも、そんな話は訊いてない」

きっぱりと窪田が言う。

まあ、そうだね。

「私も、言っていないしねえ」

別に秘密ってわけじゃないけれど、自分でもあまり受け入れたくない面倒だと思うことだったので、つつい言いそびれたってところかなあ。

「曜、だけ？」

引越しのことを話したのは。

「うん。曜だけ、だよ」

役に立ちそうなのは、曜だけだったし。

窪田はふーん、と言った後しばらく黙ってしまった。

あやや。もしや機嫌を損ねたとか？

でもね、海外に行くわけでもないし、私が地元から越したからって、ニイはともかく（ニイの家のパンの売り上げが微減小はするかもしれないから）、窪田には全く影響はないと思ったから。

だから、そこまで「言わなきゃ」って強迫観念はなかったんだよね。

「貴和子って」

ようやく口を開いた窪田クンに「はいはい」って相槌をうつ。

「曜のこと好きなの？」

ん？

11・恋は思案の外 その3

「そりゃ、まあ」

友だちだし。

そんなものでしょ、ってな顔で窪田を見ようとしたら、琴ちゃん
がもぞもぞと動き出したのが見えた。

「ん。……ば、ばあ……」

窪田が琴ちゃんを抱っこする体勢を変えた。

「琴ちゃん、起きた？」

私が声をかけると、琴ちゃんはマシユマロな手で目をこすり、「
あれ」と言った。

「おはよう、琴ちゃん」

窪田が言くと、琴ちゃんは首をぐんと動かして窪田の事を見上げ
た。

「……パパかと思った」

「そっか。もうすぐ電車を降りるからさ、そうしたらパパに会える
よ」

「そうそう。パパも今頃『ことお』って泣いているよ」

そう言いながら、曜が泣いているところを想像して、ぷぷぷと笑
う。

「パパア」と琴ちゃんは一言だけ言うと、窪田の膝に乗ったままで、
私の体にぴとんとくつついてきた。

きゃあ、ちよっと。

可愛さマックスなんですけど。

えへへ、なんていい気になっていたら、ふと目の前の親子が視界
に入った。

ママさんの隣の席が空き、男の人が座っていた。

すると、ママさんと男の人が親しそうに話しだした。

お子さまはまだ眠っている。

夫婦、かあ。

琴ちゃんがじーっと前の家族を見ている。

途端に、心臓がひゅんと掴まれたような痛みを感じた。

なんちゃってママさんだとか、適齢期なんだとか。

私はなんて軽いんだろうと。

心の中で琴ちゃんに謝った。

駅からの帰り道。

抱っこしようか、という窪田に琴ちゃんは、「歩くよ」と言った。

抱っこしようかと言った窪田にも頭が下がるが、琴ちゃんも偉いなあと思った。

琴ちゃんは私と手を繋ぎ、車の来ない場所では窪田とも繋いだ。行きとは違い、三人で手を繋いで歩いた。

途中、琴ちゃんが、マンホールを飛び越えたいと言うので、窪田がひゅっと琴ちゃんの体を持ち上げてジャンプさせた。

琴ちゃんが笑う。

体中で笑っている。

いろんなことが吹っ飛ぶ笑い声だなあ、と思った。

浄化される。

窪田も窪田で、いつでもパパになれるなあと思った。

琴ちゃんの家に着くと、曜はまだ帰っていなかった。

泣き顔が見られず、残念。

おばさんが、「まあまあ、ありがとうね」と言って、琴ちゃんを「お帰り」って抱きしめていた。

ほんわかとした気持ちになる。

では、と帰ろうとしたら、いきなりパチンパチンと手を叩く音がした。

おばさんだ。

「そうそう。お二人にお土産があったのよね」

琴ちゃんも手伝って、と言うと山口家の祖母と孫はパタパタと家の中に消えてしまった。

「琴ちゃんの手を叩くルーツを見たね」

窪田が言う。

「私も、同じことを考えていた!」

あはは、って一緒に笑う。

「貴和子ちゃん、窪田くん、ばいばい」

琴ちゃんが手を振ってくる。

「ばいばい」と私と窪田で手を振る。

お互い片手には、おばさんからのお菓子の袋がぶら下がっていた。

「飲んでいく?」

窪田に誘われる。

おこさま時間に帰宅したため、まだまだ夜はこれからって感じた。

「いいねえ」

風もいい感じで吹いてきて、歩くとても気持ちがいい。

「お店、どこにしようか」

頭の中で、ここからだどこが近いか検索をかける。

「うち来ない?」

検索、中断。

「ん。どこって言った？」

「僕のマンション」

「窪田の、マンション？」

それは意外にも初めてのお宅訪問だった。

飲み物はあるというので、スーパーで食材を仕入れることにした。

なんせまだまだ、外は明るい。

お腹のすき具合にもまだ余裕があったから、作っても大丈夫だと思っただ。

スーパーに着くと、窪田は買い物カートにかごをセットし押しました。

慣れている。

「何を食べようか」

窪田はそう言いながら、レタスとかきゅうりとかミニトマトとか（おまえさんは主婦か）をぽっぽとかごに入れていく。

それに、食べようかっていうよりも、作ろうかってことなんだろうし。

そうなる。

「うーん。……なんでも」

そんな大きなことは言えまへん。

「なんでも、かあ」

さほど困ったようでもなく、窪田は引き続きぽいぽいとカートに食材を入れていった。

そっか。一人暮らしって、自分でご飯を作るんだもんね。そりゃ、慣れるか。

「つかぬことをお聞きしますが、貴和子さん」

窪田がサルサソースなる瓶を手を持ち振り向く。

あら、窪田くん。トルティアチップスにそれをつけて食べたら、すごくおいしそうだわ。

「お料理は」できますか、と最後までは言葉にせず目で語る窪田。

「お料理、ね」窪田の目の色気（本人は無自覚に違いないぞ、おい）に抵抗するかのように視線を逸らす私。

おや。丁度いいところに、トルティアチップスくんが。

ぱっと袋を取り、さっとかごに入れる。

窪田も瓶をかごに入れた。

餅つき夫婦の阿吽の呼吸と申しますか。

これで少なくとも、何も料理はしなくてもつまみはありってことで。

ああ、考えただけでもよだれが。

「お料理は、ですね。はい。できますよ。おそうめんを茹でたり、もやしを茹でたり、おにぎりを握ったり、パンの間にハムをはさんでサンドイッチを作ったり」

他にご質問は？ ってな顔で窪田を見る。

窪田はくすくすと笑うと、「いえ、立派です」と真面目な顔を作り、「じゃ、もやしを買わないとねえ」と言いながらカートを進めた。

窪田についてスーパーを歩くのは、思いのほか楽しかった。

調味料にしても、うちの実家とは違うメーカーを買ったり。

ちょっとしたお菓子を買う姿も、牛乳一本買う様子も、眺めていて楽しいものだった。

ああ、でもそれは。

窪田の事が好きだからだよなあ……。

マンションへと向かう時点で、私も持つって言うのに、窪田はス

ーパーでの買い物袋二つを自分だけで持った。
そのかわりってわけでもないけれど、曜の家からのお菓子は、私が窪田の分まで持った。

「日が長くなってきたねえ」

窪田が言う。

腕時計を見ると、六時になっていた。

「本当だね。冬ならあつという間に真っ暗だもんね」

今はこうして歩くのには、本当にいい季節だ。

「前、貴和子がさあ」

「はいはい」

「ほら、小さい頃に友達の家帰り道、真っ暗で一人で帰ったって」

「ああ、うん」

「うん、あの話をさ、さっき思い出したよ」

「へえ。さっき？ いつだろう」

そう聞くと、窪田は両手にあるスーパーの袋を握りなおした。

「やっぱり、持とうか？」

重いんじゃないのかな。

「大丈夫だって」

「ん、でもさ、窪田ってば琴ちゃんのことずっと抱っこしてたでしょ。腰とか、痛くなっているんじゃないかと」

ほらほら、片方交換しよう、とお菓子の袋の一つを掲げる。

「あのね。どう考えても貴和子より僕のほうが、がたいがいいだろう？」

全く、貴和子は、と窪田が言う。

「変わらないじゃない。そんなところ。暗い中、一人で帰った小さい時とさ。あの時だって、きっと貴和子を助けてくれた人はいたはずなんだ」

うむむ、と唸る。

どういった話の方向になるでしょう。

「琴ちゃんの事、貴和子が切ないねとか守りたいって話しをした時さ。僕は貴和子のことを考えたよ」

え。えええ。

「そ、そう、なんだ」

一体、どんな意味で窪田が言っているのかはわかりませんが。

私の顔は、120%の確率で赤くなってます。

なんと申し上げていいやら。

「うん。そうなんだけどな」

けどな、って窪田。その問いかけるような言葉はなによ。

さっきから一体、窪田はなんなんでしょう。

頭の中がその疑問で駆け抜けたとき、「着いたよ」って窪田が言った。

おお、確かに。

窪田のマンションではありませんか。

みんなで飲んだ時も、私が窪田に送ってもらうことはあっても、その逆はないから。

窪田の実家も含め、見たことはあるけれど、足を踏み入れたことはない。

「ここ、お家賃が高そうなんですけど」

そうよ、そういったことを含めて聞きたかったのに、窪田クンから返ってきた答えは「結婚」だったのだよね。

そういえば、その前の会話もずれていたようだし。

……二人とも慣れないおこさま生活で、ちよつと舞い上がっていたのかもねえ。

と、納得しながら、でも何かひっかかりながらも、窪田のあとに続いて私はエレベーターに乗り込んだ。

12・恋は思案の外 その4

両手が塞がっている窪田に頼まれて、部屋のカギを開ける。

「窪田、先に入って」

結構な重さのある扉を、窪田が先に入れるようにと開けたままにした。

「……ありがとう」

なんか言いたそうな顔をしつつ、窪田が先に玄関に入る。

私も続けて入ったはいいものの。

「ちょ、ちょ、く、くぼたあ……ここって」

すたすたと廊下を歩き部屋に消えていく窪田の背中に向けて、私は消え入りそうな声で呼びかけた。

なんと、このマンションは、私が想像したのとは違い、ファミリータイプのマンションだったのだ。

一人暮らしっていうから、てっきりワンルームだと思っていたわけだけど。

で、結婚、でしょ。

もう一度、「くうぼおたあ」って名前を呼びつつ、その間に玄関に女ものの靴&女の影がないかをチェックした。

まあ。ぱつと見はないようだけれど、下駄箱の中にあるのかもしれないし。

一緒に住んでいる可能性は、ないとは言えないお年頃。

だとしたら、そんなところにいくら友だちとはいえ、私が侵入するのは憚れたから。

ああ、でも。

例えば窪田の部屋がワンルームだったとしても、そもそも結婚が決まっている男の部屋に、友達とはいえ他の女が来ることは、まずいことだったのでは。

逆の立場なら、嫌かも。 いえ、「かも」でなく、嫌だよね。

「あのお。やっぱり、有島帰りますう」

弱弱しく声をかけ、一度閉めたドアを開けようと手をかけた。

「なにになになに」

どたどたと窪田が部屋か走ってきて（走れるほどの広さだよ、おい）、ドアノブを掴んだ私の手の上に窪田の手がのってきた。

「ぎゃあ！」

「ぎゃあ、って、なにさ」

ぎゃあは、ぎゃあよ、をバクバクさせながら背後の窪田の近さにまた心臓が飛び上がる。

「なにになに。どうしたのさ」

手を離さないままで窪田が訊く。

「いや、ほら、あれでしょ」

「あれ？」と窪田が首をかしげる。

一度深呼吸し、小さな声で「だって、オクサン、いるでしょ」と言う。

窪田の目が大きくなる。

「オクサン？ どこに？」

え、誰かいるの？ って窪田が言う。

今日は、窪田クンと意思の疎通が上手くいきまへん。

「ほら」とますます声を小さくする私。

すると、なにになに、とますます窪田の体が近付いてくる。

誰かあ、助けてください。

「もしかして。何かが、見える、と・か？」

貴和子って靈感あったっけ？ と窪田が言う。

「だ、誰がそんなもん」

そんなすごいもん持っているかって。

「なら。まあいいから、とにかく上がりなっ」

ほれほれと窪田が腕をとる。

ここまでされているのに、腕を振りほどいてまで部屋を出て行くのは、ちよつと勇気がいる。

窪田のオクサン、私はベストを尽くしましたよ、怨むなら窪田を怨んでくださいよ。

そんな台詞を心で唱えながら、でも実際には「おじゃまします」なんて言っ、窪田の部屋に上がった私なのでした。

結論から言うと、現時点では窪田の部屋には女の人はいなかった。

影も、私にはあるようには見えなかった。

女の人以前に、窪田の部屋には、物がなかった。

片付いているというか、殺風景というか。

就職した年に一人暮らしを始めていたはずだから、住んで一、二年ってわけでもない。

スーパーでの買い物だって手慣れた様子だったのに、それと反して部屋に生活臭がないのが不思議だなんて思った。

今時の青年の家って、こんななのか？

窪田は、冷蔵庫に食材をぽんぽんと手際よく入れると、「とりあえず」って缶ビールを私に手渡してきた。

「お。リッチ」

きんきんに冷えた恵比寿麦酒だった。

最近はめつきり、税金の安いタイプばかりだったので、リッチなビールは久しぶりだった。

「いいの？ 飲んじゃって」

既にプルタブを開けようとしていた窪田が、「意外とビールの賞味期限って短いんだよね」だから、さっさと飲んだほうがいいでし

よ、と言った。

「では遠慮なく」

私も缶を開けると、窪田が「お疲れ様」って乾杯をしてきた。

あゝ、おいしい。

「料理を作る前に、なんかつまむ？」と聞いてきたので、とりあえずのビールのおともとして、チップス&ソースを所望した。

あんまりくつろぐと、次の一步がでないからとキッチンで立ちながら飲んだりつまんだりした。

飲みながら最近のビール会社の大きなニュースとか、この間の選挙の事とか、そんなことに対してのあれこれを話していた。

「投票所、いつになく並んだなあ」

窪田が選挙についてのんびりと言うと、私も「ほんとだよねえ」と言った。

「ほら、姉が結婚するじゃない？　うちって朝一番に家族そろって選挙に行くのがこれまでの習慣だったから、『今日は家族一緒に最後の選挙だ』なんて、言っていたんだ」

あの時は、最後だなんて言いながらもわいわいと出かけ、帰りにこれまたいつもと同じくファミレスで朝食セット食べてにぎやかに帰って来たわけだけど、こうして第三者にそのことを話すと「最後」が現実味を帯びて迫ってきて、淋しい気持ちになった。

「引き出物、何にしたの？」

先日、私は姉の引き出物選びに付き合ったのだった。

「引き出物といえさあ。ちょっとオニイサン、聞いてくれる？」

姉の全く悪びれない顔を思い出す。

「持ち込みもOKってところだから、そりゃもう都内のデパートやら陶器で有名なギャラリーまでを歩きに歩きまわりましたよ」

その間、姉は旦那さま予定者の愚痴（のろけか？）やら、私との昔のバトルについて（主に姉の勝利だが、少ない彼女の負けについてそりゃ悔しそうに）話してきて、引き出物を熱心に見たのはむし

ろ私だったのだ。

なのに、「やっぱり、決められないからカタログにする。人の好みっていろいろだもんね」と帰宅するなり姉は言い放ったのだ。

「どう思う？」

私がチップスをマイク代わりに窪田に突き出すと、窪田は笑っていた。

「どう思うって。うーん、そうだなあ。仲がいいんだなあ、とか、お姉さんは貴和子が好きなんだなあ、とか？」

「なにそれ」

全然違うわよ、と私は言うのと、思いっきりマイク（チップスであるが）を食べた。

「そう？」

そろそろ作るかなって、窪田がビールを飲み干す。

「そうよ、全然違う。窪田、わかってないよ」と言いながら、私も缶を空にした。

「貴和子は、もやし担当ね」

あのあと不敵な笑みを浮かべつつ本当にもやしを買った窪田は、その袋を私に渡すと「よしなに」と言った。

むっときた私は、「驚くほど早くておいしいもやし料理を作るからみてなさい！」と言うと、もやしをざるにあけて洗い（独身男性の家にざるがあるなんてねえ）、鍋に湯を沸かしてその中にざぼっと入れた。

レタスをもらってもいい？ と窪田に訊いて、冷蔵庫を開ける。そのままレタスも手でちぎって洗い、ざるにあげて水気を切ってお皿にのせる。

茹であがったもやしをざるにとる。

あれ？ いつの時点で塩をふったかなあと、人に食べさせるとなるといつもは意識しないことを考えたりして。

でもまあ、いいやと、ざるにあるもやしに塩を振る。

「深い器か、ボールってある？ お鍋でもいいや」

窪田はさっと、おしゃれな大きなめな陶器の器を出してきた。

「これも所謂、引き出物だな」

窪田が言う。

へえと思いつながら、もやしをその中に入れ、ごま油を振る。

「これで、熱がとれたらレタスに乗せておしまい。もやしのナムルだよん」

これなら、一人でもやし一袋はいけるよ、と私は言う。

窪田はお箸で、それをつまんで食べ、「あ、おいしい」と意外そうな声を出した。

「貴和子さん、嘘つかない」

窪田は私に向かって拍手をすると、もやしとレタスの入ったお皿をテーブルの上に置きに行った。

「なんか、貴和子の真似っぽくなるけど」

そう言うと、窪田はレタスを太めの千切りにした。

「なす、大丈夫だよね」、と冷蔵庫を開けながら窪田は訊いてきた。

「うん、好き」

よしよし、と窪田は言う、袋に入った水ナスのお漬物を出し、ヘタを取るとそれをレタスと同じように細く切り、レタスと混ぜて少し塩を振った後、「貴和子の真似」と言っでごま油をまわし入れた。

今度は私がそれを味見して、「あ、おいしい」とわざと意外そうな声で窪田に言う。

「窪田君、嘘つかないし」と、窪田も真似する。

そのあとも、お互い料理を作りあいながら（と、いっても私が次にしたことはそうめんを茹でたり薬味を切ったりしたことだけ。だってレパートリーがねえ）、キッチンに立っていた。

まあ、窪田にしても冷奴を作ったり（窪田いわく、ここの豆腐を

買えば間違いないっていうメーカー)、ナムルがあるならチヂミもどきでもと、ニラを入れた小麦粉系のものを焼きだしたり。

私は窪田シェフに言われるがまま、冷蔵庫から出した調味料を配合してチヂミにつけるたれを作成したり、さっき自分が作ったサラダを完成させたり、お取り皿を出したりと、まめに働いた。

いきなりお肉の焼ける音もしてキッチンを覗くと、「ああ、そうめに肉はあわないか」と窪田が言ったけれど、「気にしないよ」と私は言った。

どーせ飲むんだし。

「せめて味付けは和風にでも」

そう言うと、窪田は梅干しを取りだして刻んでそれを醤油やらの調味料と一緒にフライパンの中に入れた。

「梅干入り焼き肉って、どんな味よ」

「あれ？ 入れない？ おいしいよ」

またそういった悩殺スマイルを私に向けてくる窪田。

はいはい。

あんたの作るもんなら、私にはなんでもおいしいでしょうよっ。

ん。

待て待て、この台詞。

これじゃまるで、若い女の子にいれあげるオヤジじゃないのさっ。

13・恋は思案の外 その5

努力の甲斐あってか、食卓は賑やかなものになっていた。

私の大雑把な料理が、窪田の冷奴に花を添え（冷奴以外あえて割愛）、椅子に座ると流石にお腹がすいたなあと思った。

料理を作りながら、日本酒に合いそうなメニューだねってことになったので、冷酒を飲むことにした。

「これも引き出物」って、窪田は切り子のグラスを出しすとお酒を注いだ。

改めて窪田と乾杯をする。

少し辛口。

冷たくておいしい。

「そっかあ、引き出物ね」

涼しげなグラスを掲げ見ながら言う。

「そうだよな。私も引っ越したら使おうかなあ」

上唇がお酒で濡れているのを感じながら、押し入れの中に入っているいくつかの引き出物を思い浮かべる。

「引っ越し、いつ？」

「うん、そうだなあ」

窪田の冷奴を食べる。

「あ、これおいしいね」

細かく刻んだみょうががピリツと効いている。

「あ、引っ越しがいつかって話だよな。姉の結婚式が、来月でしょ。まあ、来月っていつても、もうすぐなんだけどさ。で、それが終わってから、親が田舎に行くわけですよ。行くというか、帰るというか。もう東京での生活は、嫌なんだって。姉もお嫁に行って海外に行くわけだし、もういいだろうって」

「……貴和子がいるのに、ねえ」

「そうなのよね。でも、まあ、私は仕事もあるし、放っておいても一人でも大丈夫って思うんだろうね」

物騒な世の中だっているのに、よく娘を大都会に残していくわ、
と思ってしまうのはかなり甘えた意見。

「いやさ、誘われたのよ。一緒に田舎に帰って、そこで暮らさない
かって」

実はそれこそかなりしつこく言われたのだ。

貴和子、彼氏もないみたいだし。（余計なお世話だ）

だったら、一緒に田舎で生活して、あっちで旦那さん見つける
のも選択の一つだって。

まあ、そう親に言わせてしまう私の二十数年の歴史があったって
ことなんだけど。

旦那はともかく、あっちで仕事があるのかは甚だ疑問であった。

「家は、まあ、急がなくても。ありがたいことに、貸すことは決ま
っているけれど。それももう少し先だから」

窪田はふーんと言って、私のもやしを食べた。
うまかる？

「その家賃収入はさ、田舎での両親の生活費にもなるんだし大事な
のよ。で、私はどこか通勤が便利で家賃の安いところを探している
ってわけ」、と窪田に言う。

水ナスのサラダに手を伸ばす。

ごま油がいい。

しかも、私のもやしより簡単だ。

けど、いざ作るとなると、この水ナスの漬物が高そうだなあ。

「今は通勤どれくらいだっけ」

「うーん。四十五分くらいかなあ」

「なら、いいほうだよな」

「上等なくらいよ」

まあ、今度住むところは（場所はまだ決まっていなくても）、家賃のことを考えると通勤時間は考えないといけないんだろうな、とは思っている。

「ならさ、ここに住めば？」

窪田の口がそう言ったあと、切り子のグラスに近づくのぼんやりと眺めた。

あれ。

私の耳、おかしいなあ。

窪田の口が切り子に触れるか触れないかのところで、手が止まる。

おやおや。そういえば、今日、同じような動きを見たなあ。

「僕と一緒に住まない？」

あれ。

私、すごく酔っているかもしれない。

と思いつつも、もっと酔えば耳の聞こえも脳の情報処理能力も、正常に戻るかもしれないとお酒を飲む。

またまた上唇がお酒で濡れる感覚が気持ちいい。

今日はどれくらいのアルコールが体内に入ったかなあ。

「貴和子」

「え。はいはい」

窪田に名前を呼ばれて返事をする。

なんでしよう、と酔っていないことをアピールするために微笑んでみたり。

「僕さ、結構勇気出して言ったんだけどなあ。聞いてた？」

「うん。通勤時間だね」

「四十五分って、それは聞いたから」

「そっか」

お素麺でも食べるか、と氷水に沈むそれに手を伸ばす。

窪田のお箸が私のお箸を掴む。

「窪田くん、とてもお行儀が悪いです」と私が言うと、「人の話を聞かないほうが行儀が悪い」と窪田が返してきた。

「はいはい。で、なによ、いったい」

仕方がないなあとお箸を置く。

窪田も置く。

「わかった。言い方を変える」

窪田がじっとこっちを見る。

「貴和子は、住むところがないんだよね」

「ちょーっと、ちょっと！ その言い方はいくら窪田でも、失礼ってもんだわよ」

「わかった。ごめん。じゃ、言いなおすよ。貴和子は住むところが決まっていらないんだよね」

「まあ、そうね。不本意ながら」

「だよね。で、ここは部屋が余っているから、貴和子はここに越してくれればいい」

「ここ？ 窪田のマンションに？」

「そう」

窪田の真剣な顔を見ながら、なるほどそうか、と合点がいった。

「窪田は、ここを出て別のマンションに住むのね」

結婚した後もここに住むんだと思っていたんだけど。

でも、このマンション。

私にはとてもじゃないけれど、家賃なんか払えないって。

「えっ。べ、別のマンション？ ちゃんと人の話を聞いていた？」

なんで僕が引越すのさ」

「さあ。話の成り行きで、そうなのかなあ」と

「ちっともそんな話の成り行きになんかになってないよ。引越さないよ。僕は貴和子と住むから」

「私と、とな？」

「うん」

はて。

「つまりが……。三人、でってこと？」

「三人？ 誰と誰と誰さ」

「あれ？ だから」

そのお、窪田のオクサンでしょ？ と疑問形。

「僕の、オクサン？」

「うん。だって、結婚するんだよね」

遊園地でさ、そう言ったよね、と繰り返す。

窪田は思い出すかのように、眉間に皺を寄せだした。

「結婚って。ああ、あ？ ああ、うーん。あれか？」

言ったなあ、と窪田が笑う。

その窪田の反応全てに困惑する。

笑っている場合じゃないよ、窪田。

頭、大丈夫か、窪田。

ニイでも呼んだほうがいいのか？

怪訝な表情であろう私を見て窪田は苦笑すると、「貴和子には言っていないかったもんな」なんて私に言う。

窪田は椅子の背に背中をつけると両手を椅子の座面につけて、体を反るような動きをした。

そしてぱっと顔を再び私に向けると、「振られたんだよね」と言った。

振られた？

窪田が？

「で、結婚するんだって、彼女」

学生時代の同級生だって。

「はあ？ なにそれ」って言葉が口から出てしまった。

「だって、窪田、結構長く付き合っていたよね。なのに、同級生？ どこからそんな人が」

「アメリカから」

「あ、アメリカあ？ 窪田、外国の人とお付き合いしていたの？」
金髪に青い目といった、ワンパターンな女性像が私の中を駆け巡

る。

「あはは。違うよ。彼女の同級生が」

「アメリカ人！」

今度は、クラーク・ケントが頭に浮かぶ。

「貴和子さあ、人の話を最後まで聞きなよ。つまり、仕事で海外に行っていたってこと。貴和子が『どこからそんな人が』なんて言うから、言葉で遊んだだけだって」

「そっか。二人とも日本人なんだ」

「そっ」

「なあんだ」

窪田になあんだ、なんて言った後、ちょっと待て、今は大変失礼な会話だったと冷や汗が。

「ご、ごめん。窪田。なあんだ、なんて言っ。窪田にとってはちつともなあんだ、じゃない話なのに」

これ以上暴言を吐かないうちに、帰ったほうがいいのか？

それこそ、ニイにでも来てもらったほうが。

「いいんだ。貴和子の言うとお。なあんだ、って感じだよ」

窪田が言う。

ああ、でも貴和子に今こんな話をするなんてなあ、と窪田がつぶやく。

「そのことは、もういいんだ。今から――あとから思うと、彼女が彼でなく僕を選ぶ可能性もあったんじゃないかって、自惚れと思われるかもしれないけれど、そうだったサインやチャンスはあったんだ。でも、僕がそのことをスルーしていたというか。彼女の想いに對して誠実じゃなかったというか」

窪田が彼女とのことを話し出した。

四人で飲んでも、みなお互いの恋愛に関して深く追求することはなかった（彼女の有無くらいは知っていたとしても）、こういった恋愛の内面の深い感情について窪田から聞くのは初めてだった。

「もっと、必死さというか、貪欲さがあれば違っていたのかなあ
て思うよ」

表情のない顔で窪田が言う。

そんな窪田の顔は、見ていたくないと思った。

窪田の彼女のバカ。

窪田はいい奴なのに。

いいパパにだって、いつでもなれるのに。

お料理だって、そこそこ出来るし。

「大丈夫だよ。次はきっと大丈夫だから」

何が大丈夫なんだよ、と自分でもよくわからなかったけれど、それしかもう私が言える言葉はないって思った。

片想い歴軽く十年超える私に、恋愛指南なんてできるはずもなく。

恋愛に関して言えば、窪田と私じゃ、プロとアマ程の経験の差があるのは明らかだし。

まあまあ、飲んで、とお酒を窪田のグラスに注ぐ。

強引に、私のグラスと窪田のグラスをそっとつけ乾杯をすると、

窪田もグラスを手を持ち飲みだした。

やれやれ、よかった。

「ソフトクリームが食べたいんなら、人のを横取りせずに自分で買わないとね」

窪田の何の脈絡もない発言に、はてなと首を傾げる。

そんな私の反応を見て、窪田は眼だけで笑うと、「でも、欲しければ横取りでも仕方ないと思わない？」と言った。

ふうむ。

それは昼間の私たちの会話だけだ。

そんなに窪田はソフトクリームが食べたかったのかな？

「だから、もし貴和子が曜を好きで、曜が貴和子のこと好きでも、僕は貴和子を横取りしようと思う」

友だちなんかじゃない、男の人の目をして、窪田が私をじっと見つめてきた。

14・恋は思案の外 その6

私が曜を好き？

曜が私を好き？

で、窪田が私を、横取り？

「貴和子、聞こえてる？」

窪田が、じつと固まったままの私の目の前で手をひらひらさせる。

「き、聞こえたけど」

自分に都合のいいように聞こえた、とか？

「またまた、話がずれるんじゃないよね」

今日の会話は、見事にずれずれたよね、と窪田が言う。

「うん、そうそう。ずれずれたよね」

激しく同意。

「あのさ。そこは別に即答しなくてもいいところなんだけどなあ」
一体今日何度めの告白か、と窪田が続ける。

「とりえず、一緒に住もうよ」

さっきキッチンで言った、「とりあえず、ビール」みたいな口調で窪田が言う。

「貴和子の部屋を見せるから」

窪田が椅子から立ち上がり、そして私の椅子の背を引いた。

言われるがままに、立ちあがり、手も窪田に掴まれるままに、私は窪田の言うところの「貴和子の部屋」に連れて行かれる。

「全く使っていないんだよね」

がらんとした部屋に段ボールが一個だけ置かれている。

「広さは、六畳、あるかないかなあ」

そのまま部屋の中に入り、窪田がカーテンを開ける。

「真っ暗になったね」

外の景色を見てそのままの感想を言う。

「流石に日も暮れたからね」と窪田も言う。

ふと、今更ながら、窪田に掴まれた手を意識する。

窪田の手は私の手首を掴んでいる。

すると、窪田は何を思ったのか、その手を下にすつとずらし、私と手を繋いできた。

「げっ」

「げっ？」

窪田がからかうような顔で私を見る。

「な、なんなのよ。一体、どうしたのよ」

友だちとしての窪田になら数えきれないくらい会って過ごしてきたけれど、こんな妙な行動の窪田には、今日初めて会った。

いや、でも、それも私の勘違い？

窪田にしてみたら、これも友だちとしての……。

「誘惑してるんだよ。貴和子を」

ゆ、ゆーわくう？

「まっ。またまたあ」

友だちとしての反応しか返せず、あはは、このお、とか笑ってみる。

「ほんとだって」

僕ってそんなに信用ないかなあ、と窪田がぼやく。

あのお、窪田クン。

信用とかそういった問題では。

「な、なんで、私を」

私でなくても、っていう思い。

あたなの周りには、いくらでも女性はいるでしょうに、って。

「はは。なんでかねえ」

なんでだろうねえ、と窪田が言う。

そして、「もう一部屋あるから、貴和子の好きなほうを選んでい

いよ」と窪田は手を繋いだまま歩き出した。

その部屋に行く為には再びリビングに戻るようで、さっきまでは全く意識になかったリビングの横の扉を窪田は「どうぞ」なんて言っ
て私の手を離し開けた。

そこは、窪田の部屋だった。

まあ、「窪田の部屋」といえば、このマンションの一室全てが「
窪田の部屋」なんだけれど。

つまりが、窪田が寝起きしている部屋というか。ベッドルームと
いうか。

「先に言っておくと、僕がさっきの部屋に移ってここを貴和子に、
とか、そういったことじゃないから」

ん？　って顔で窪田を見上げると、「あ、今回はそこまで考えて
いなかった？」と言う。

十秒は、思考が全く働かなかったんだけど、十一秒後にいきな
り全てが繋がった。

体中の力が抜ける。

だめだあ、立ってられない、と思いしゃがみ込んでしまう。

「あのさあ。窪田って、窪田っていつもこうなの？」

「こうなの、って？」

窪田まで私のとなりにしゃがみ込む。

「……容赦ない、と言いますか」

容赦ないかあ、と窪田がつぶやく。

「それは悪かったね。でも、こっちも必死だから」

必死だから、の言葉に顔をあげる。

窪田と目が合う。

すると、窪田はすごく優しい顔で私を見ていた。

そんな窪田の顔を、表情を、瞳を、探るように私は見た。

窪田はずっと優しかった。

高校の時から、そりゃもう。

彼女にも、そうでない女の子にも、クラスメートの男子にさえ、「あいつは優しい」と言わせる男だった。

だから、窪田の優しい顔にも、言葉にも私は慣れているはずだった。

けれど、今の窪田の顔は。

勿論優しい顔なんだけれど、今日のそれは、私が窪田の一番大事な人だと勘違いさせるような色合いがあった。

それは私がいつも傍観者として窪田を見ていたとき、彼が彼女に向けてしている顔だった。

そしてそれこそが、私が窪田を好きだと思う大きな理由だった。

窪田は好きじゃない女の子とは付き合わない。

嫌々とか、なあなあとか、流されてとか、そんな風には付き合わない。

ちゃんと好きな子と付き合って、その子をととても大切にするのが窪田だった。

彼女がいることを隠さないし、彼女の悪口も言わない。

私は長いこと窪田が好きだけれど、会ってすぐに好きになったわけじゃなかった。

高校に入って、ニイや曜や窪田と同じクラスになって、意外と近所だっということがわかって、なんとなーくつるむようになって。

その時でさえ、私は窪田を特別な男の子としては見ていなかった。

変化があったのはその年の夏休み前のこと。

窪田がやたらと一学年上の女の先輩と一緒にいるところを、見かけるようになったとき。

私が単なる冷やかしからかいの意味を込めて、「あの人って、窪田の彼女？」なんて聞いたとき、窪田は「そうだよ」って答えたのだ。

それこそ、即答。

そして、その迷いのないきっぱりとした言い方に、変な話だけ

ど私は落ちてしまったのだ。

照れるでもなく、誤魔化すでもないその返事に、優しいだけじゃない窪田の男らしさというか、真っ直ぐさを見たのだ。

いいなあと思った。すつごく。

そんな窪田もいいし、窪田に好かれる女の子も幸せだなあって。私もそんな風に好かれてみたいなあって。

「私のこと、好きなの？」

高飛車にも聞こえかねないその質問を、私は思い切ってしてみた。

「好きだよ」

同じ目線で、窪田が言う。

「今晚、貴和子を家に帰したくないくらい好きだよ」

しゃがんだままで、ずずずと窪田を避けるように後ろにさがると壁にぶつかった。

引く、って言葉を体現するとまさにこういった行動になるらしい。

「あ、逃げた」

「なんか、怖いよ、窪田。半径五メートル以内侵入禁止ね！」

「五メートルって。僕、マンションから出ることになるよ」と言いながらも、窪田は今いる場所よりも私とは離れた床にペタンと座りなおしてくれた。

どうしたらいいんだ。

これから、どうしたら、って頭がいっぱいになっていたら、「あのさ」と窪田が静かな声で話し出した。

「貴和子の事はさ、ずっと友だちだと思ってた」

窪田自身が自分に聞かせるような、ゆっくりとしたかみしめるようなしゃべり方だった。

その話し声に、少し安心して、私も壁にもたれてぺたんと体育座りをした。

「貴和子の事は、曜やニイと同じように、気が置けない信じられる友だちだった。そしてそれは僕に彼女がいても関係ないって」

貴和子は覚えているかな、と窪田が私の顔を見た。

「高校三年の時、僕が井波さんと付き合った時にさ、貴和子が凄く僕から距離を置いたじゃない。高校では勿論、大学に進んでもさ」

井波さんの名前にどきんとする。

距離を置いた、なんて、窪田にもそういう自覚はあったんだなあとちよつと驚く。

気なんか付いていないって思っていたから。

「最初はなんでかなあと思ったけれど、井波さんのことを考えて貴和子が気をつかってくれているんだなあって分かって。気持ちとしては複雑だったけれど、でも学校や大学で距離を置かれても、貴和子とは地元っていう繋がりがあるからって大丈夫だって、ここに帰ってくればっていいんだからって思ってた。実際、僕が思うに貴和子は外ではこつちを無視しても、ここではそんなことなかっただろ？だから、まあ、それはそれでいいやって思ってた。ともかく、ここなら、貴和子はいつもの貴和子だし。僕もそうだしさ。なのにな」

あの琴ちゃんの爆弾発言は効いたよ。

「貴和子がさ、ここからいなくなるって引越すって聞いたとき、血が逆流しそうになった。こんなこと言ったら大袈裟に聞こえるかもしれないけれど、貴和子がここからいなくなるなんて、そんなことはダメだって思った。ありえないって。しかも、そのこと知っているのは曜だけだっていうし。そしたら、井波さんが昔言ったことを思い出して」

—— 有島さんと山口君って付き合っているんだって。

「それを聞いたとき、彼女にはそんなのデマだって言ったんだけどさ」

うーん、と窪田が唸る。

「たとえ今もそうなんだとしても、二人が付き合っているとしても、僕は曜に貴和子を渡したくない。曜は友だちだけど、それでも、曜に貴和子を渡したくないんだ」

生まれて初めて、というか、おそらく一生涯で好きな男の人からここまで言われることはないんじゃないかって告白に、言葉を失ってしまふ。

何か言うべきなんだろう。

そりゃ、そうだ。

でも、なんて？

「貴和子」

窪田が呼ぶ。

「貴和子に近づくなって言われたから、僕はここから動けないよ」
そうそう五メートルだから。

「だから貴和子から来て」

な、なぬ？ と窪田を見ると、窪田は笑っている。

笑っていやがりますよっ。

瞬間、わかってしまった。

曜に渡したくないとか。

曜から横取りするとか。

そんなこと言っではいるけれど、本当は窪田は知っているんだって。

私たちがそんなんじゃないってこと。

知ってて言うんだ。

きっと、私が窪田のことを好きだっていうのも、うすうす気が付いていたに違いない。

悔しいというか、恥ずかしいというか。

けど。

悔しいけど、恥ずかしいけど。

そんな思いで、人生の無駄遣いはしたくない。

手にできるハッピーエンドなら、がつつりと掴みたい。

窪田が手で、「おいでおいで」をしてきた。

私は壁から背中を離し立ち上がる。

五メートルもない距離をゆっくり窪田へ向かって歩く。

そして窪田の前で一度立ちどまって、窪田の顔を、笑顔を見る。

悔しいくらいハンサムな顔。

そんな窪田の、いつもいつも傍観者だった私。

でも今は。

私だけを見ている。

そして私も傍観者じゃない。

膝をついてしゃがみながら、窪田の広げた腕の中にゆっくりと入っていく。

「捕まえた」って窪田のさややき声を右耳で聞く。

窪田の腕は私の体をふわっと抱きしめた。

違うよ、窪田。

捕まえたって思うのは、私の方なんだよ。

でも。でもさ。

少しだけ窪田から体を離して、彼の顔を見る。

「これからは」

今までの、長年の反撃とばかりに私も言う。

「窪田は私のことだと思いきりはらはらして、うーんと焼きもちをやくがいいわ」

これくらいは言わせてほしい。

これだけ片想いしていたんだもん。

少しくらい優位にたっても罰はあたらないって。

だって、私はまだ言っていない。

好きだって言ったのは、窪田だけ。

形式上、告白したのは窪田。

今度は、窪田が私に片想いなのだ。

「楽しみにしているよ」

そんな窪田の台詞を聞きながら。

結局、はらはらしちゃうのも、焼きもちをやいちゃうのも私なんだろうなあと、思いつつ。

窪田の事を抱きしめた。

14・恋は思案の外 その6（後書き）

これで、貴和子と窪田の恋物語はおしまいです。

15・乙女心はわかりません。（沙希・ニイ）

「ニイになんて、女の子の気持ちは分からないのよ」

ぼそりと向田沙希がつぶやく。

「はぁ？」

今まさに、バゲットサンドを食べようと思った瞬間のその台詞に、手が止まる。

「はぁ？　なんて返してくるあたり、既に終わっている」

全く、どうしたもんかなあ、なんて沙希が言う。

短くてくるんくるんの髪の毛が、初夏の風に吹かれて揺れる。

店の休み日の、いつものごとくの平日デートなので、人気のオーブンカフェもランチ時とはいえ空いていた。

「商品開発ヒントのためのカフェ通い」という名目のもと、俺は沙希をまめに呼び出しては、今までの分を取り戻すがごとく一緒に飯を食うようにしていた。

——好きな子には優しく。

とりえず、それが沙希から俺への課題であり。

だから、メニューだって沙希に先に（洒落か？）渡すようにしているし、メニューを沙希が迷っていても大人しくじっと待つようにしているし、「暑いから嫌だ」って言うから手だって繋がないで我慢しているし。

そんな努力家の俺に向かったの、その台詞。

「なんだ、それ」

こっちだって色々我慢やら何やらをしているんだぞ、ってな意味を込めて沙希の髪の毛にふーっと風を送る。

「ちよっとお、やめてよ！　髪が乱れるでしょ」

もう、ニイはあ、と沙希がふくれる。

その顔は昔からなじみ深い、見慣れた顔。

「その顔」

ひひひ、と笑いながらバケットにかぶりつく。

パンの中身は、自家製のテリーヌと香味野菜だった。

で、ソースは……。

「聞ってるの？ ニイ」

「あ、え、うん。聞ってる聞ってる。俺が女心をわからないっていうんだろ？ だったら沙希が教えてよ」

むー、と唸りながら沙希がアイステイーを飲む。

「だから私は、ニイと一緒にお店の厨房に入りたいって言ってんだってば」

「だから俺は、そんなことしないでいいから店内のあれこれを沙希に任せたいって言ったんだよな」

そうよっ、と沙希が言う。

俺と沙希は、結婚を前提に付き合っている。

沙希の家は肉屋で、そこでも彼女は看板娘だった。

だから、うち（パン屋だ）でも、同じような仕事をしてくれればって思ったのだ。

そんなわざわざ製菓学校に通わなくてもいいんだと。

「ニイはさ。由梨子ちゃんのことをどう考えているの？」

由梨子？ 由梨子は妹だ。

「どうって、そりゃあ」

由梨子のことだと思うのは、曜とのことだけだった。

妹の由梨子は、俺の友だちの山口 曜に長いこと片想いをしている。

曜は一度は結婚したが、離婚して地元に戻ってきていたので、チヤンスだとばかりに由梨子をけしかけてみたのだけれど。

かわいそうにも、由梨子は曜に振られたらしい。

それ以来、由梨子は妙に静かだし、曜にいたっては店に来なくなっ

由梨子をけしかけた張本人の俺としては、自分が沙希と上手いき幸せなだけに、余計妹を不憫に思う日々なのであった。

「由梨子には、幸せになつて欲しいと」
しみじみと言う。

沙希は俺の言葉にぽかんと口を開け、そのあと「いかん、いかん」と言い、キリリとした顔をしてこっちを見てきた。

「ニイのそーいうところはお兄さんばくていいと思うけど、私が聞きたいのはそーいうことじゃなくて」

沙希がポテトに手を伸ばす。

彼女はハンバーガーを頼んでいて、その付け合わせが大きいものほつくりしたポテトフライだったのだ。

「もしかして、の話をするよ。もしかして、私がニイじゃなくて、普通のサラリーマンの人と結婚したとしたら」

ぎょつとして沙希を見る。

なに？ そんな話があるわけ？

俺の異変に気がついた沙希が、「だから、違うってば。もしかしての話だってば。仮定の話よ」と慌てる。

「だからね。もしかしてそうだったら、私はそのまま実家の店の手伝いをしていたと思う」

全く面白くない仮定なので、「ふーん」とだけ言う。

だってもうそんな仮定、意味ないし。

「私にとってお店での生活っていうのは、もの心ついた時からものだから。そこを手伝いながら大きくなってきたわけだから。ねえ、ニイだって、そうでしょ。パン屋さんが昔から生活一部でしょ？」

それはそうなので、「うん」と答える。

「あのね。だから、さ」

今までずっとニイの家のお店の顔は由梨子ちゃんだっただでしょ、と沙希が言う。

「私たちもそうだったように、由梨子ちゃんにとっても、お店は生活の一部なんだと思わない？ それなのにニイは、無神経にも私に

由梨子ちゃん場所に行けって言う。ニイは由梨子ちゃんの気持ちとか考えたことないんじゃないの？」

ガツンときた。

沙希の言葉は、その通りだったから。

俺は由梨子が店で働いているということに、そこまでそこまでは深く考えていなかった。

それこそ、由梨子の存在は店の空気と同じように考えていて。

しかし、沙希の話を聞いたあとでは、由梨子からその場所を取るの、今の由梨子の状況を考えても酷なことだと、恥ずかしいけれど今初めて気がついた。

兄、失格だあ。

「それにさ」

沙希はまん丸な目をくりくりさせていた。

「私ね、日本一おいしいパンってやつを自分でも作ってみたいんだよね」

そのためには、やっぱり基礎から色々と学びたいし、と。

おい、沙希。日本一おいしいパンだと？

そりゃ、随分大きく出たなあ。

沙希は、早速学校への申し込みをするとかで、そうすると来月からは週に四日は、その学校に通うらしい。

そうなるとしばらくは、平日のランチデートは難しいかも、と言っていた。

なんだかなあ。それもどうなんだかなあ、と思う。せっかく、こうしていい感じになってきたっていうのに。
でも、待てよ。

ふっと、沙希と二人で厨房に立つ姿を浮かる。

口元が緩む。にやにやとしてしまう。

「お兄ちゃん、大丈夫？」

冷蔵庫から冷たい緑茶を出した話題の人物である由梨子が、「お兄ちゃんも飲む？」と聞いてきた。

「ああ、飲む。サンキュ」

二つのグラスに緑茶を注ぐ由梨子の後ろ姿を見る。
なんだかなあ。

「お兄ちゃん」

はっとすると、由梨子がグラスをテーブルに置きながら「携帯」と言った。

見ると、メールの着信ランプが光っていた。

「おお。サンキュ」と礼を言い、画面を開くと。

「ぬあにい？」

にわかに信じがたいその内容を、瞬きをしてもう一度見る。

「……由梨子、聞くが、今日は四月一日じゃないよな」

「違うけど」

「他に、ほら、海外からの習慣で、今日は嘘をついてもいいとか、人をだましていいとか、そういったこともないよな」

「ないでしょ？ そんなの聞いたことないよ」と、由梨子はびっくりした顔でそう答えた。

「何かあったの？」

「あったも、なかったも」と言いながら、携帯を操作して電話をかける。

留守番電話サービスにつながるかと思った瞬間、「なんだよ」と曜の不機嫌な声がした。

「なんだよじゃねーよ。おまえにも来たかよ？ 窪田からのメール」

ああ、そのこと、と曜が言う。

「窪田からのメールに『貴和子と同居します』なんてあったけど、

おまえ知ってたわけ？ 窪田と、き、貴和子が一緒に住むって」

由梨子がぶつと緑茶を噴き出す音が聞こえた。

俺が見ると、「ごめん」と手のゼスチャーをして、台布巾を取りに行った。

「知ったのはおまえと同じで、さっき来た窪田からのメールでだけど」

「そ、そうか」

曜も知ったのは今か、と少し安心……じゃなくて。

「で、曜の感想は」

「いいんじゃないの」

「おまえ、それでも友達かって」

「はっ？」

「貴和子がかawaiiそうだ」

「はぁ？」

「また冷たい返事を。あいつ、貴和子はさ、ずっと窪田の事が好きで、でも全く女扱いされなくて。挙句に『同居』だぁ？ 何なんだよ。『同居』って、どーいう意味だと思う？ 『同棲』でもないし、

『結婚』でもなくて。『同居』？」

俺には窪田が何を考えているか、さっぱりわからなかった。

「細かいなあ。……まあ、いいんじゃないの？」

曜がまた適当なことを言ってきた。

「いいって、なんだよ」

むきになって言い返す。

「いいは、いいだよ。構うな、ほっとけよ」

面倒くさそうに曜が言う。

「ほっておけるかよ」

貴和子だぞ。親友だぞ。

「大丈夫だって」

どこからそんな言葉が。

「また無責任なこと言いやがって。もしも貴和子が泣いたら、おま

えが責任とれよ」

曜の対応に腹が立ち、ついついキツイ言葉を放つ。
すると、「いいよ」って曜の返事が携帯の向こうからした。

「え。い、いいよって」

おいおい。待てよ、曜。

と、話そうとしたら、電話は既に切れていた。

おい、曜。男が責任とるってことは、よお。

「ごめん、お兄ちゃん。電話中に、ってあれもう終わった？」

机を拭きながら由梨子が言う。

由梨子ごめん！！　と心の中で謝りながら俺は激しく落ち込んだ。

しかしここでめげている訳にはいかない。こうなったら由梨子を投入だ。

「由梨子さあ、おまえ、たまには曜に電話とかメールとかしたりしないわけ？」

由梨子の顔は見ず、机を拭く手元だけを見て言う。

その手がぴたりと止まる。

「お兄ちゃん。あのさ」

そう言うのと再び由梨子の手が動きだす。

「私、未だかつて曜ちゃんの携帯の番号もアドレスも教えてもらったことないんだけど」

それだけ言うと、由梨子は台布巾を持って机から離れた。

「お兄ちゃん」

「は、はいっ！」

「あんまり人の恋愛に首を突っ込まないほうがいいかもよ」

「うっ……はい」

確かに、そうだ……。

ああ、俺はなんてことを！！

由梨子をけしかけて失恋させただけでなく、曜まで煽って貴和子

のことを引き受けるように約束させちゃうなんて。

穴があつたら入りたい。

穴がなくても、どこかにしばらく隠れたいと、切に思った。

「最悪だね」

全ての告白を沙希にすると、彼女はその白い頬をピンクにしながらそう言った。

「最悪、だよなあ」

もう俺はどうしたらいいんだあ、ブランコに座りながら頭を抱えた。

あのあとすぐ沙希を呼び出し、近所の公園で会ったのだ。

誰かに聞いてもらわないと、もう、もう、どうにかなりそうだったから。

「傲慢、無知、無神経」

「……」

「間違はなく、地獄行きだよ」

「ああ、ほんと、どうしたら」

大声でうおー、と叫んだら、少しはましになるだろうか。

「まあ、救いはその行いの全てが善意からきているってことだけだね」

善意、だと？ 「そんなこと」 一体何の意味が。

「そうね。本人が『善意からなんだ』なんて言ったらしらけるけれど、ニイはそういうこと言わないから。だから、私が代わりに言うてあげたんだよ」

ブランコを立ちこぎしだした沙希が言う。

沙希の小さな体がブランコと一緒に揺れている。

「ま、どうにかなるよ。っていうか、しょうがないじゃん」

「……まあ、そうなんだけど」

だけど、よお。

「あれれ。有島さんだ」

そう言うと、沙希はブランコから降りた。

公園の前の歩道を、沙希が言うとおりに貴和子が歩いていた。

貴和子もこっちに気がついたのか、おやおやって顔をしながら、手を振ってきた。

ああ、このタイミングで会うなんて。

「こんばんは」

貴和子はブランコのところまで来ると、沙希にニコって笑った後、俺にも「元気？」なんて言ってきた。

元気、ないっす。

「有島さん、窪田君と一緒に住むの？」

内角直球ストレートな球を、沙希は貴和子に放った。

「へへ、そうなんだ。窪田からメール来た？」と、貴和子が嬉しそうな顔をして俺を見た。

ん？

「お、おまえ。いいわけ？」

は？　ってな顔で貴和子が俺の顔を見る。

「いいってなにが？」

「いや、だからさ」

同棲でもなく、結婚でもなく、同居でいいのかって。

それって、今俺がそのことを聞くのって、貴和子のことを窪田が女として見ていないって第三者から改めて言われるようなもんだ。

かーっ。

……い、言えねえ。

流石の俺でも、そこまでは言えねえ。

もごもごとする俺を沙希が呆れたような顔で見ている。

「急に決まったの？」

伏兵沙希が聞く。

「うん。実はさ」と、貴和子は両親が田舎に帰り今住む家を貸すこと、貴和子が一人暮らしをしないといけなくなったことを話し出した。

「だからって、窪田と住まなくても」

おまえが傷つくような真似をしなくても、と言いたかった。

窪田は良くも悪くも、女とは縁はある奴だと思っているから。

もし、貴和子と同居している最中に、あいつに彼女でもできたら。

そう考えただけでも、鳥肌が立つ。

やめてくれーって。

「あの。あのね」

今度は貴和子かもごもごとした。

「言われちゃった。窪田に。好きだって」

「わぁ、素敵」

沙希が盛り上がる。

え。

え。

えーっ！！！！

「嘘っ！」と俺が言った0・5秒後に、沙希からのチョップが頭にガツンと入る。

「失礼な男だな、ニイは」、沙希が怒る。

貴和子はそんな俺たちのやりとりを見てびっくりした顔をしたあと、「や、まぁ、そうだね。私だって、嘘って思ったし。あはは」とフォローしてくれた。

っーか、あれだな。

貴和子にフォローさせるところが、お粗末クンだよな俺。

しかし、つまり、上手くいったってことかよ。

マジかよ。

本当かよ。

「同居」って言葉にこだわる必要はなかったってことかよ。

すげー、紛らわしい。紛らわしいけど。

「ニイ、涙が出てるよ」

「ば、馬鹿言え。これは涙じゃない！ これは心の汗だっ！」

沙希が、「ニイってば誰よ？」なんて言いながら笑う。

貴和子も、ニイってばもう何よ、って言いながら背中をバシツとはたくので、心の汗をかきまくって油断をしていた俺は危うくブランコから落ちるところだった。

貴和子が帰って、沙希を家まで送る途中、沙希の小さな手がずっと俺の手を握ってきた。

いいのか？ って顔で沙希を見たら、沙希は少し照れた顔をしながらも頷いた。

こっちからも沙希の手を握り返す。

柔らかくて、小さい手だなあ。

「ニイのこと、少しわかった気がする」

沙希が言う。

「少しわかったって、今頃？ 一体何年の付き合いだよ」

すると沙希が、「何言ってるのよ」と反論してきた。

「私とニイなんて、付き合いは長いかもしれないけれど、反目の歴史の積み重ねだけだったじゃない」

まあ、そうかもしれない。全ては俺のせいってか。

「私、知らないもん。ニイが高校の時にさ、先生に私の癖っ毛のことを言ってくれたとかさ」

ねえ、なんて顔で沙希が俺を見上げてくる。

「お、おまえ、それを誰に」

確かにそれは俺がしたことだけだ。

でも沙希は知らないはずで。

「へへへ。秘密だよ」

ひい・みつ・つーだよつ、とりズムよく沙希は言うように繋いだ手をキュツと握ってきた。

柄にもなく、顔が赤くなる。

「さつき、ニイが泣いたとき」

「ば、馬鹿言え。誰が泣くか」

沙希がずっと目を細めたあと、「はいはい。心の汗ね」と言いなおす。

「私ね、ニイのこと、好きだなんて思った」

……はあ？

「な、なんでえ？」

「は？　なんで？」

沙希が目をまん丸くしている。

「俺が、心の汗を流すのがいいとか？　沙希は泣き虫……いや、泣いていないけど、つまりそーいう男が好きってことか？　おまえ変じゃない？」

「ニ、ニイって……」

せつかく繋いでいた手を、沙希がブンと離す。

「傲慢、無知、無神経」

そう言うとき沙希は、こっちに向かって、べえーとしたかと思うと、目の前に見えてきた自分の家まで走って帰って行った。

な、な、な、なんじゃい、あれは!!

好きだって言ったり、あんな顔してみせたり。

どっと疲れる。

全くわけがわからない。

—— ニイになんて、女の子の気持ちは分からないのよ

そうかもしれない。はっきり言って、全然わからない。

項垂れながらも、まあ今日は沙希と手も繋げたし、貴和子も窪田と上手くいったみたいだし、と前向きなことを考えつつ。

一番の懸案である妹のいる家へと向かって歩き出した。

16・ぐるぐる熊になったうりこ姫と天の邪鬼（由梨子・曜）

——「曜さあ、結婚したみたいなんだよね」

久しぶりに兄の口から出た曜ちゃん情報にいきなり打ちのめされたのは、今から数年前のこと。

そして。

——「いらないんだ」

私の告白未満の言葉に、曜ちゃんからそんなお断りのカウンターパンチをくらったのは今年の二月のこと。

季節はゆつくりと移り、冬から夏へ。

曜ちゃんの足はすっかりお店から遠のき、私の視界からもさっぱりと消えてしまった。

なのに、未だに私の曜ちゃんへの想いは消えぬままで。

もう一体どうしたらいいものかと、消化不良の熊のようにぐるぐると曜ちゃんへの想いを持て余す日々が続いている。

「もう、次に行こう！」

久実ちゃんがテーブルの上に置かれたグラスを手に持ち、私のグラスへとカチリと乾杯をしながらそう言う。

「え。うん、まあ。でも」

煮え切らない態度の私に、もう何十回目になるかわからない同じセリフを久実ちゃんは言ってくる。

「世の中にはさあ、結婚適齢期の独身の男性っていうのは、うじゃ

うじゃいるんだから。まあ、中には素行不良危険人物もいるってわけなんだけど」

そう言うのと、「あの時は、本当に悪かったわ」と久実ちゃんが続けた。

以前、久実ちゃんと今日のようにご飯を食べる約束をしていたら、そこに久実ちゃんの彼氏とその友達って人まで来て、拳句の果てにその友達っていう人は私を送るとか何とか言って付いてきて、更にとんでもない暴挙までしでかし、それをばっちりと曜ちゃんに見られてしまうという最悪にとんでもないおまけまでついてしまったのだった。

その直後、曜ちゃんに例のカウンターパンチをくらい。

まあ、私が曜ちゃんに振られたのは私自身の問題なんだけど、振られた時期とその人の暴挙が重なったため、どうもその人に対して恨みめいたものを感じているのは事実だった。

「言い訳をさせてもらえれば」

「言い訳？」

久実ちゃんの言葉に反応して、自分でも目つきが悪くなっているのを感じる。

「うん。すっごい言い訳」

「ふーん。なあに？」

「あのさ。あれから随分経ったでしょ？」

「あれから。まあ、そうね。でも、だからって」

「分かっている。だからって、あいつのしたことは許されない。うちの彼も、グーであいつのことを殴った」

久実ちゃんの彼はわざわざ私の家まで来て、「本当に申し訳ないと玄関で土下座までしていった。」

「全部あいつが悪い。由梨子にあんな身勝手なことをして。私たちも散々怒ったわよ。なにのあいつ、言うわけよ。由梨子ちゃんにもう一度会いたいって」

「……へっ？」

「うん。もう、それこそこの数カ月ずっとよ。会わせて欲しいって。どうも、ひと目惚れだったみたい。由梨子に」

私に、ひと目惚れ？

頭の中に、マンガで言うところの「ガーン」って効果音が響いた。

鏡を見る。

この私がひと目惚れをされるとは。この顔で。

鏡の中の、ごくごく普通の顔に手をあてる。

そもそも、ひと目でも、ひと目がつかなくても、惚れられるなんて経験はあまりない。

こっちが惚れるばかりの人生だった。

だからこそ、惚れる側の想いはわかる。

「そんなの聞いたら尚更のこと、その人と会うなんてできるわけないじゃない！」

久実ちゃんにもそう伝えた。

久実ちゃんは「やっぱり、そうだよね」と言うと、その後その話は一切しなかった。

でも正直なところ、男の人から好意を寄せられたという事実が、私の中で小さな希望でもあった。

ずっと曜ちゃんだけで、その曜ちゃんには受け入れてもらえない状況で、段々と私の中の女の子の部分が、自信を失い始めていたのは事実。

……このままじゃ、いけないよね。

前に進むにも、やっぱりしつこく曜ちゃんを想っているにせよ、今のままのじゃ私がダメになる。

といって、一体どんなことをしたらいいんだろうと考えても何も思い浮かばず。

うーん、と思いながら鏡に映った自分を見て、ありきたりな行動だけど今までしたことのないことをしてみようと思った。

「ゆ、由梨子っ」

日頃私の何を見ても、何のコメントもない兄の目が点になっている。

「変?」

自分でもよくわからないので、兄に感想を求める。

「変ではないけど、見慣れない。違和感がある」

「違和感、かぁ」

まぁ、そうなんだろうなって髪に手をあててみる。

「こんなに短くしたのって、初めてだし」

今までずっと背中にかかるくらいの髪の長さだった。

「髪が短いと、首と耳がすーすーするね。男の人ってこれでよく風邪をひかないよねえ」

しみじみとそう言うのと、兄は「馬鹿だなあ」って小さく笑った後、急に頭をぐりぐりと撫でてきた。

「お兄ちゃん、私は近所の小学生じゃないんだから」

もう、と怒りながらくしゃくしゃになった髪の毛を直す。

するとまたもや兄が、「馬鹿だなあ」とつぶやいた。

私のショートヘアは、お客様にも衝撃を与えたようで、来てくださる常連さんがことごとく「誰だかわからなかった」と、この変身(?)に対する高得点を付けてくださった。

案外と似合っているようだ。

髪型を変えると、似合う洋服や着てみたい洋服も変わって、お休みごとに私は買い物を楽しんだ。

気持ちいが外に向かうと、今まで音信不通の友達にも連絡をとりだ

したりと動き、その結果、突然だけど高校のクラス会の幹事をする
ことになっていた。

そんな自分を不思議に思いながら楽しんでいる自分がいる一方で、
客観的にそんな自分を見ている自分がいるのも感じていた。

「あ、お兄ちゃん。週間天気予報を見るからチャンネルは変えない
でよ」

同窓会は今週末だった。

テレビのリモコンを握っている兄にそう声をかける。

「うん。俺だって気になるし、今週の天気」
そうなのだ。

兄は向田さんと「おデート」なのだ。

兄は小さな頃から向田さんを好きだったそうで（それも私には唐
突に感じられて驚いたことだけ）、あれこれあった末によく
結婚を前提にお付き合いが出来るところまでこぎ着けたのだ。

なにせ昔から、そして付き合いだした今でも、喧嘩が多いお二人
さん。

ついこの間も、かなり大きな喧嘩をしたようだった。

何が原因かは知らないけれど、お兄ちゃんが私にぼそりと「俺っ
て無神経かな」と訊いてきたので、多分お兄ちゃんの言動が喧嘩の
原因なんだと思う。

どうなっちゃうんだろう、と思っていたら、つい先日仲良く二人
でうちでお茶を飲んでいたので、ほっとしたところだ。

喧嘩するほど仲がいい、ともいうし。

この調子でいけば、結婚するんだろうなと思う。

で、お兄ちゃんと向田さんが結婚したら、向田さんはきっと実家
でなくうちで働くことになるんだろうなあと。

誰もそんな話はしないけれど、多分そうなるんだろうなあと。

そうなる私、ちょっとお邪魔虫っぽい存在になるなあとか。

——『山下 由梨子さんもよいお年頃になったけど、お嫁にもい
かないで一体いつまでこのお店で働いているんでしょうね』

「……晴れると、いいね」

私がそう言うと、「本当だよ。よろしく願いしますよ天気予報
様」とテレビに向かって兄は拝みだした。

クラス会の一次会は、遊園地だった。

クラスメイトでそこで働く人がいて、割引をしてもらえるとい
うことになったからだ。

遊園地なんて久しぶりで、実は絶叫系が好きな私は積極的に乗物
に乗っていた。

「山下、すげえ」

一緒に並んだ山口君が、感心したような声を出した。

「え。そう？」

「うん。残っている女子、山下だけだった」

「え？」

あれれ、と思い周りを見回すと、女子は私だけで男子も山口君を
含めた数名だけになっていた。

他の人たちは、パラソルの下でジュースを飲んだりアイスを食べ
たりしていて、私の視線に気がつくと手を振ってきた。

「山下がこんなに活動的だとは、知らなかったなあ」

うーん、と言いながら伸びをした山口君が言う。

「もっと大人しい子かと思っていたから。ほら、髪もいつも長くっ
てさ」

いつ頃から短くしたの？ って訊いてきた。

「私、大人しいつもりはなかったけど。まあ、そう見えたのかな。
髪を切ったのは最近なんだ。近くにいい美容院があるって聞いたん
で、試してみようかなあって」

まあ、あながち全くの嘘ではない。

美容院のことは、向田さんから聞いたことだから。

「山口君は」

山口君は、と彼の名を呼ぶと、途端に高校の頃に山口君にしてきたことへの罪悪感を思い出した。

曜ちゃんの苗字は「山口」だ。

だから私は山口君を呼ぶたびに、「曜ちゃんが私の同級生だったらなあ」という憧れを重ねていたのだ。

勿論そのことは、山口君は預かり知らないことなんだけど。

そう意味でも、私の中で山口君は思い出深いクラスメイトだったのだ。

「山口君は、大人っぽくなった。社会人っぽい」

「俺が？　そう？」

山口君はそう言うのと、「自分ではわからないなあ」と言った。

列が進んだ。前に並んでいた男子たちが「お先に」って言って、コースターに乗りこんだ。

ちょうど私と山口君の前で、ロープがかかったのだ。

「山下も、昔と同じように、可愛いよ」

山口君がぼそりと言う。

「え。私が？」

いきなりそんなこと言われて。お世辞だと知りつつ顔が赤くなる。

「あ、ありがとう」

「どういたしました」

「おまたせいたしました〜！　お待ちのお客様っ！　どうぞっ！　お進みくださいっ！！」

係りの人の元気なその声に、山口君と二人で顔を見合せて笑った。

その後もなんとなくの流れで、私の隣には山口君がいて、遊園地

から居酒屋へと進んだ二次会の時も席は隣だった。

久実ちゃんからの意味深な視線を何度か受けながら、あまり経験のないこの状態をどうしていいか分からず、流されるままに過ごしていた。

「山下さん、メルアド教えて」

二次会が終わり解散のときに、山口君からそう言われた。

「う、うん」

そんなものなのかな、って思いで山口君とメルアドの交換をした。

でも、そういった行為が酷く個人的な付き合いの領域へと入ってくるのを感じたのも事実で、少し構えるような気持ちにもなった。

「山下さんさあ」

山口君が携帯をしまいながらこっちを見た。

「あんまないでしょ。男と付き合ったこと
ずばり言われる。」

「うん」

挑戦者のように、好きな人にアタックした経験はありますけど。

「別に、俺、メルアドを聞いたからって、山下さんを取って食おうなんて思っただけから。もう少し気楽にしてよ」

「う、うん」

まあ、そうなんだろう。

私が考えすぎなだけで、山口君にとっては、ワンオブゼンの女子であるわけで。

「だから、付き合わない？」

「う、うん……。は？」

「ということで、よろしくね」

そう言っていると山口君は、はい握手なんて言って手を握ってきた。

「ちょっと、ちょっと。山口はなんだって？」

帰り道、久実ちゃんが聞いてくる。

「ああ、まあ、いやはや」

あはは、って笑いで誤魔化す。

そんな私を久実ちゃんがじろりと見た。

「……やめたほうがいいんじゃないのお。『山口』は」

久実ちゃんがため息をつきながら言う。

「思いつきり、某山口氏を引きずっていると感じるのは、私だけでしょうか」

「く、久実ちゃん」

「他にいくらでもいたでしょうに。佐藤でも木下でも。なのに、なんで『山口』かなあ」

何言われたか知らないけどちゃんと断んなさいよ、って大声で言いながら手を振ると、久実ちゃんは彼の家に泊まるとかで、いつもと違う方向へと帰って行った。

彼の家に泊まるなんて。

そんなすご技は、私にはないものだ。

久実ちゃんと別れ一人で歩く帰り道が、急に味気ないものを感じた。

久実ちゃんを羨ましいと思った。

自分のことを好きだと思ってくれる人と、自分が好きだと思う人が同じなんて、信じられないくらい幸福なことだと私には思えた。

私がそこへたどり着くには、私が好きな曜ちゃんに私を好きになってもらうか、私を好きだと言ってくれている（らしい）久実ちゃんの彼の友達を私が好きになるかだ。

そして、曜ちゃんから見た私と、私から見た久実ちゃんの彼の友達は同じポジションなのかと思うとくらつときた。

望み、なし。

わかっているけど、何度もわかれようとしているけれど。

ああ、また、消化不良の熊になってきた。

ふと目の前を見ると、コンビニがあった。

そのお店の明かりを見ていたら、消化不良の熊のくせして、甘いものが食べたくなってきた。

口の中いっぱい広がるプリンの味を思い浮かべてコンビニのドアを開けようとしたら、なんとそこから曜ちゃんが出てきた。

曜ちゃんをひと目見た途端、曜ちゃんなしでのここ数ヶ月間で感じた楽しさの数々は、全てが偽物だと思えた。

髪の毛を切ったこともそう。

それに似合う服を買ったこともそう。

友だちと遊んだのもそう。

そして、今日の同窓会も……。

久しぶりに見る曜ちゃんは、相変わらず少し猫背だけど、消化不良しがいがあるくらい素敵だった。

そして、もう、一生ぐるぐる熊でもいいやって思えるほどカッコよかった。

もうもう、やっぱり大好き。

「……入るのか？」

曜ちゃんが、その大きな手でドアを押さえたままそう訊いてきた。

曜ちゃんの反対の手にはコンビニの袋があつて、お買い物を済ませたことがわかった。

「入らない、入らない」

甘いものより、曜ちゃんのほうがずっといいもの。

「ふーん」

そう言うと曜ちゃんは押さえていた手を離し、歩き出した。

私も曜ちゃんのすぐ後ろを歩きだした。

目が脳が、曜ちゃんを見ることに喜びを感じているのがわかる。

今度はいつ、こんな風に曜ちゃんを見ることができかわからないので、見溜めしておこうと瞬きの時間さえ惜しいと感じた。

黙って歩く私たちの間で、曜ちゃんが持つコンビニの袋の揺れが唯一つの音だった。

何を買ったんだろうと、じっと袋の中を見ると。

「あれ、曜ちゃん。パンを買ったの？」

曜ちゃんは答えない。

「コンビニでパンを買うならうちで買えばいいのに。そんなに値段は変わらないでしょ」

味なら負けないし。

すると曜ちゃんは、しばらくの沈黙ののち「おまえがいるし」って言った。

おまえがいるし、って。

ああ、やっぱり。

思いっきり避けられていたわけなんだって、改めて思う。

曜ちゃんに会えて盛り上がっていた想いが一気に萎む。

曜ちゃんは、うちのパンが大好きだと思う。

だって、曜ちゃんは嫌いなものにお金を払うような真似はしないたちだから。

結婚してこの街を去ってしまう前も、そして戻ってきてからも、曜ちゃんはずちにパンをよく買いに来てくれた。

なのに、私がお店に立つせいで、曜ちゃんが来ないんだとしたら……。

「私、お店には立たなくなると思うから」

きっと、向田さんがお店のレジに立つようになるんだろうし。それが自然だと思うし。

向田さんは、実家のお肉屋さんでも看板娘だった。

彼女なら、きっちりお店を守ってくれると思った。

そうになると、私はいよいよ。

「今すぐってわけじゃないけどさ。そうしたら曜ちゃん、うちに買いに来てくれるよね」

どっちにしても曜ちゃんのことを見ることはできないのなら、コンビニでなく曜ちゃんが好きだと思ってくれるうちのパンを買ってくれるほうがいい。

「おまえさあ、」

曜ちゃんの声を聞きつつ、左目が危険人物の存在を察知した。

途端に歩みが止まってしまった。

一度しか会ったことがないけれど、あの姿はもう脳内にしっかりとインプットされていて。

つまりが、久実ちゃん彼の友達を発見しました。もう、ありえないんですけど！

でも、まだ彼の視線が全然こっちに向いてないのがわかる。

髪に手をやる。

短くなったから、私に気がつかないのかもしれない。

そう安堵したのも一瞬で、このまま歩いていたら、もしかしたら気が付かれるかもしれない。

それに、今はやり過ごせても、いつかはつかまってしまうのかもしれない。

さっき安易に、この人に好意を寄せられていることに気を良くしていたことを悔いる。

緊張した。

そして怖くなった。

久実ちゃんに連絡を……と思った瞬間、久実ちゃんが彼の家に行ったことを思いだした。

ってことは、久実ちゃんに連絡をすればそのまま彼を連れてきてくれるに違いない。

本当は警察でも呼びたい気持ちだけど、まさかこれくらいのことでは動いてくれないだろうし。

ともかく、わかつていることは、このまま曜ちゃんと歩くことはできないってこと。

曜ちゃんに迷惑をかけてしまうから。

「よ、曜ちゃん」

ん、とばかりに曜ちゃんが振り向く。

「あ、あの、やっぱり、コンビニに、私」

思ったよりもびびっているのか、声が震える。

「わ、私、コンビニに」

「由梨子」

静かに曜ちゃんに名前を呼ばれ、「はい」なんて答えてしまう。

すると曜ちゃんは立ち止った私の肩を抱いて、そのまま歩き出した。

すると、今までとは全く違った意味での緊張が私を包んできた。

ありえない。

曜ちゃんに肩を抱かれるなんて。

多分私、ロボットみたいな歩みになっていると思う。

うわあ、うわあ、と心の中は打ち上げ花火状態で、もう、久実ちゃんの彼の友達どころの騒ぎではない。

と、思いつつも、久実ちゃんの彼の友達へ近づくにつれ、彼があれ？ って顔で私のことを見ている視線にも気が付き、再び怖くなる。

「山下、さん？」

暗闇から遠慮がちに、久実ちゃんの彼の友達が声をかけてきた。

「あんた、誰」

私がおかを言う前に、曜ちゃんが聞いたこともないような凄みを

きかせた声でそう言った。

「誰って。……山下さんの友達で」

久実ちゃんの彼の友達が、そうだよなってな顔で私を見てきた。

「ふーん。こいつの友達ねえ。じゃ、念のため、俺にもあんたの名前と連絡先を教えてくれる？」

曜ちゃんがそう言うのと、久実ちゃんの彼の友達は一步下がった。

「な、なんであなたに」

「『友達の友達は』って言うじゃない？ それに、もしこいつがあなたのことを友達だなんて思っていなかったらさ」

曜ちゃんがそう言うのと、久実ちゃんの彼の友達は更にもう一步下がった。

「しかるべきところに通報するのに、その情報は役立つでしょ」
そこまで言われて初めて久実ちゃんの彼の友達は状況が分かったのか、項垂れた。

「山下さんには彼氏がいないって」

久実ちゃんの彼の友達が言う。

「だから？」

曜ちゃんの冷たい声が響く。

「……。もう来ません」

「そうして」

曜ちゃんの言葉に、久実ちゃんの彼の友達は乱暴な足取りで私たちの横を通り過ぎて行った。

いろんな意味で初めてづくしの経験に、体中ががくがくしている。

けれど、ともかく久実ちゃんの彼の友達はいなくなってくれた、そして多分もう来ないだろうという安堵が胸に広がった。

助かった、と思った。

そして私を助けてくれたのは、まさかの曜ちゃんだった。

その曜ちゃんの腕が私の肩からすつと離れた。
途端に体が寒くなる。

心細くなる。

曜ちゃんは何を思ったか、体を曲げるようにして私の顔を覗き込んできた。

「ぶっ」

いきなり曜ちゃんが噴き出す。

「面白い顔」

うっ、と言葉につまる。

妙齡の乙女に対して、その台詞。

どーせ、私はそうでしょうよ。面白い顔でしょうよ。

そう言っただけなのに、口がうまく開かない。

口がもげもげして動かない。

「迎えに来てもらえよ、ニイに」

曜ちゃんが兄の名を出す。

確かに、遅くなるときは頼むことも多かったけれど、今日は途中まで久実ちゃんと一緒だったし、と言いたかったけれど、結果、曜ちゃんにお世話になったわけだからそんなことも言えないし、口もまだうまく動かない。

でも、お兄ちゃんだって向田さんと忙しいだろうし。

それに結婚でもしたら、いつまでも妹にかまっていられないし。

「曜ちゃん、迎えに来てよ」

心で思ったことがストレートな言葉となって飛び出た。

「曜ちゃんが来てくれたら」

そう。

「曜ちゃんがいい」

ただっ子のように、私はその言葉を何度も繰り返す。

「由梨子」

曜ちゃんに名前を呼ばれて黙ってしまふ。

「意味ないだろ、そんなこと」

「曜ちゃんには意味はなくても、私には」意味はあるのだ。
曜ちゃんと何かで繋がりたいんだから。

本当に来てくれるなんて期待していない。
ただこの場で、嘘でもいいから、そう言って欲しいのだ。
口だけでもいいのから、そう言って欲しいのだ。
それだけで私は、凄く頑張れるから。

「俺に、どうしろって言うのさ」

曜ちゃんの静かな声がした。

「曜ちゃんのこと、好きでいさせてほしい」
恐々と曜ちゃんの顔を見る。

曜ちゃん、怒った顔はしていない。

「でもって、また曜ちゃんが誰かを好きになろうって思ったときの
候補の一人として私も入れて欲しいっていうか」

あ、自分でも凄く感情が高ぶってきたのがわかる。

唇が震えてきた。

「曜ちゃんは琴ちゃんが大事なすごくわかっているから。曜ちゃんがそんなことを考えるのは、今はまだ無理でまだまだ先だってわかってるから。だから、……そう、琴ちゃんが大きく、なって、お嫁さんに行ってからでも、いい。それからでもいい、いいから」
そんなことを言っていたら、遂には涙が出た。

ここで泣くのはいくらなんでも反則だろうとは思いつつ、言葉の中にも「ひっく」なんてしゃくりあげるような涙声も混じってきて。

そしてしまいには、二十過ぎた乙女とは思えないような「えーん」
なんて声で私は泣きだしてしまったのだ。

曜ちゃんの前で、最悪な私。

もう、この場にはいられない、一刻も早くこの場を立ち去ろうと、

一人で歩き出した。

歩きながら泣くなんて滅多にないことで、なんとか泣き声を止めようと体に力を入れるもんだから、腹筋が痛くなってきた。

「由梨子」

曜ちゃんの声がした。

そして、曜ちゃんの手が私の頭の上にぽんと乗った。

びっくりして立ち止ってしまふ。

そのまま、動けない。

直立不動で立ったままの私の耳に、「馬鹿だなあ」って曜ちゃんの声がした。

お兄ちゃんと同じこと言う、と思って曜ちゃんの顔を見たらまた、「馬鹿だなあ」って曜ちゃんはつぶやいた。

その晩、曜ちゃんは家まで送ってくれた。

そして、家に入った途端、携帯が震えて、久実ちゃんと彼氏からまたまた謝罪の電話が入った。

どうやら、彼の友だちから連絡があつたらしい。

その事実更に安堵する。

でも、寝耳に水な久実ちゃんの彼氏は怒り心頭で、心臓発作を起こしそうだと久実ちゃんは言っていた。

こんな風に、電話で事を済ませることができたのも、曜ちゃんのお陰だと思った。

もう、ぐるぐる熊でもなんでもいいやって思った。

曜ちゃんのことを私は、好きすぎる。

曜ちゃんのこと、好きなのをやめない。

やめてなんか、あげないよ。

朝になると、案の定、目は凄く腫れていて。

誤魔化すためにと、全力で目を冷やしてなんとか腫れを落ち着かせたあと（でもまだ多少腫れているけど）、お店の開店準備を始めた。

お兄ちゃんが焼く、バゲットのいい匂いがする。

その匂いに包まれながら、消毒液につけた布巾を使い陳列棚を拭きだす。

店内の隅々が掃除し終わったので、次はシャッターを開けてお店の窓を拭きだす。

気持ちがいいくらいの青空。

今日もいいお天気だなあと、都会の空を見上げる。

「よっす」

空を見上げていた私の後ろから、曜ちゃんの声がした。

……空耳？

「朝からとぼけた顔しているなあ
この毒舌！」

「よ、曜ちゃん！」

幻？ 蜃気楼？ 目をごしごしとこする。

「あほか」

幻でも蜃気楼でもない、正真正銘の曜ちゃんがいた。

「やる」

曜ちゃんが、私のシャツの胸ポケットにクシャツとした紙を入れた。

……ごみ？

「遅くなったとき、迎えに行くから」

それだけ言うと、曜ちゃんはスタスタと私の横を通り過ぎて行った。

……まさか。

………まさか。

この紙には！

「おい、由梨子。おまえ店の前で……って。大丈夫かよ」

お兄ちゃん。

私、死んじゃうかもしれません。

17 お兄ちゃんには、わかりません。

「由梨子って、どうなってんの？」

由梨子が家にいないのを確認したあと、伝票整理をする母親に訊く。

今日は店の定休日で、本来なら沙希と出かけたところではあるが、あいつは学校だ。

「世界一おいしいパンを焼きたい」と体が小さい割には大きな野望を持つ沙希は、製パン学校へと通い始めたのだった。

まあ、それも。

俺と結婚する為っていうか。

そう思うとついついにやけてしまい、妹の由梨子からは「お兄ちゃん、気持ち悪い」なんて随分なことを言われてしまうのだが。

ま、そんな由梨子だが。

由梨子是由梨子で、うんともすんとも言わない置物のような携帯をじっと手にしながらほほ笑んでいたりして。

気持ちの悪さでは、人の事を言えないだろうと思う。

さらに、ここ最近全く店に顔を出していなかった曜が、再びパンを買いに来だして。

そんな二人の様子を、俺だけが気にしているってわけでもないと思っただから、だから「由梨子って、どうなってんの？」と母親に訊いたのだ。

なのに母親は、伝票整理する手を休めることなく、「なんのことよ」と返してきたのだ。

この母にしてあの娘あり。
呑気というか、危機感がないというか。

「どうなってんの、って言えば、あ、あれだろ。ほら、あれだよ。つまり、あれって言ったら一つしかないだろ」

曜だよ、曜とのことだよと声に出さずに心で叫ぶ。

すると母親はようやく手を止め、俺の顔をじっと見てきた。

「あら、驚いた。由梨子、お兄ちゃんに言ったのねえ」

ふーん、と母親が感心したような声を出した。

なんだ、その反応は。

つか、「言ったのね」ってことはやっぱり進展があったってことじゃないかいよお。

「まあねえ。万が一ってこともあるから、お兄ちゃんに一応言っておけばって言ったんだけど。あの子ね、ちょっと恥ずかしいとかなんとか言って、出かけちゃって。それにね、あんたが知ったら、ほら、あんたって意外と心配性だからあれこれ由梨子に訊きそうじゃない？　そうなるうちよつと大変だしねえ、って私も思ったし」

そう言う母親は、仕分けした伝票を大きなクリップで止め、椅子から立ちあがった。

「さてと。お茶でも飲もうかしらねえ。紅茶でいいかしら？」

お湯、お湯と言いながら母親が薬缶に水を入れる。

「あ、サンキュ。紅茶でいいけど。……で、その話、どうなったわけ？」

母親の背中にそう声をかける。

「どうなったも、こうなったも。今、病院に、産婦人科に行っているんだからわからないわよ」

は？　病院？　で、産婦人科？

「ああいうのって、すぐに結果って出るもんなのかしら」

け、けけけ、結果！

「紅茶、キャンセルッ！」

「あらま」

母親ののんびりとした「あらま」の声は、部屋を飛び出しながら聞いた。

超特急で二階に上がり自分の部屋に行った俺は、携帯をとり、迷わず曜に電話をかけた。

それにしても、 あいつら。

いつの間にそんなトコロまでっ！ 聞いてないしっ！

……まあ、聞かされても困るが。

曜の携帯は、留守電になっていた。

仕事中だろう。

しかし、時間的には昼休みでもある。

俺が、すぐにこっちに電話をするようにとメッセージを残すと、五分もしないうちに折り返し電話があった。

「仕事中なんだけど」

名乗りもせず、愛想ない曜の声がした。

「よ、よ、曜。……お、おまえ。由梨子になにをつ！ 今日、由梨子がどこに行っているのっ」

落ち着け、落ち着けと唱えるのに、つつい声が上ずる。

「由梨子？ どうかしたの」

ああ、こいつが由梨子を「由梨子」なんて呼び捨てにするのも、今更ながら、やけにムカついてきた。

だいたい、人の妹を呼び捨てになんかするか？

「さん」付けだろ。

でなければ、「ちゃん」でもつけやがれっていうんだ。

「と、と、とにかく。責任を」

「責任」

「そ、そうだ。だから――」

「電話だとよくわからないから、悪いけどさ」

悪いけどさ、と言うと曜は、昼休みに会社まで来てくれと言ってきた。

しかも、食い物を持って来いと。

分かったよ！ と乱暴に電話を切ると、そのままの勢いで下に行き、今朝焼いたパンで調理パンの用意をし始めた。

母親はのんびりと紅茶を飲みながら、俺の様子に目を丸くしている。

「あら、お兄ちゃん。今度はなによ」

マグカップの端から、ティバックのひもをたらした母親が訊いてくる。

そんな母親に、俺はきりりとした顔を作り、安心していいんだよと二度ほど大きく頷く。

「曜に会ってくるから」

なにも心配することはないんだと、目で訴える。

「へえ。曜くんと。で、二人でそれ食べるの？」

俺が手際よく調理する様子を見て言う。

「母さんの分も作っておくから」

再び、二度ほど大きく頷く。

「あら。ありがたいこと」

そう言う母親は、紅茶を飲み干し、再び伝票整理を始めた。

「時間、あんまねえけど」

曜に指定された時間は、一時過ぎだった。

なんでも、急遽会社の人が長期休暇をとったとかで人手不足らしい。

ともかく、とても忙しいらしい。

昼飯時もとくに過ぎて腹が減っているであろう曜なのに、俺が置いたパンを前に、ぎょっとした顔をした。

「これを全部一人で食べと」

まあ、確かにたくさん作ってしまった。

アドレナリンを大量に放出しながらしたせいかな？

「おまえが食えない分は持って帰るし……俺も食うし」

そう言っ、そこにあったパンを一つ手に取りぱくりとする。
うまい。

あんな状態でもここまでできる俺って、天才か？

曜の会社は、俺たちが使う駅から二つほど先にある、若者に人気の街にあった。

やつの親父さんが、最近この街に設計事務所を移したのだ。

俺だとなんとなく浮く街だけど、曜には悔しいことに似合っている。

そんなことを思いつつ、持参したポットからコーヒーを注ぎ曜に渡すと、「ニイ、まめだね」と言われた。

「で？」

一口コーヒーを飲んだ曜が訊いてきた。
そうだよ。

今日の目的は、曜に飯を食わせることではなくて！

「由梨子ちゃんと呼べ！！」

俺の叫びを聞き、曜の目が点になる。

そして、実を言う俺も。

いや、そうなんだけど、確かにそれも言いたいことなんだけど。
順番が。

「おまえのことを、か？」

怪訝そうな顔で、曜が訊いてくる。

「ば、ばか。違うって。由梨子の事をだよ」

「へえ」

「へえ、じゃないっつーの。由梨子は俺の妹で、おまえの妹でもな
んでもない。よって、今後曜が由梨子のことを、由梨子と呼ぶのを
禁ずる。これは兄としての権限だ」

だいたい、友達の妹を呼び捨てなんかにはしないだろうと。窪田を
見習え、窪田をつ。

「ふーん」

そう言いながら、曜はコーヒーを飲んだ。

じっと奴の顔を見ると、口だけで笑っている。

「……コホン。で、それでだな。本題だ」

俺がそう言うと、まだあるのかって顔を曜がした。
しかし。

この微妙な話を兄としてどう切りだすかが問題だ。
さっきは電話で、「責任とれ」なんて言ったわけだけど。

「つまりだ。ええと、あのおいざ、本人を前にすると、言葉が出てこない。

「あ、これ、うまそう」

曜が俺の作ったパンに手を伸ばす。

「そうか?! それ新作でさ」

曜が一口食う。

「うまい」

「だろ? よし、次はこれだ。これはだなあ」

山のように作ったパンの中に、いくつかの試作品もあった。

曜に次々と勧めながら、毎回の「うまい」の感想に気分がよくなる。

曜はお世辞は言わない奴だし、まずいものも食わない奴だ。

こいつの味覚は信頼できる。

試作品を一通り曜に食わせ、良い評価を貰った俺はすっかりいい気分になった。

「じゃ、そろそろお客様が来るんで」

曜は「ごち」と言いながら立ちあがる。

「いや、ちょっと」

「あ。その甘いやつ。貰ってもいい?」

琴にやりたいから、と曜が言う。

「そうか。それは勿論」

サンキュ、と言うのと、曜の携帯がなったのは同時だ。

曜の顔が、ぱっと仕事のものになる。

俺は琴ちゃんにお土産にするパンだけを袋に入れなおし机に置くと、曜に目だけで挨拶し家路についた。

「お兄ちゃん、お帰り」

いただいているよ、と俺が作ったパンを由梨子が食っていた。

心の準備ができていない状態で由梨子の顔を見てしまい、かなり動揺する。

「おいしいね。これ」

お店に出してもいいんじゃない、と由梨子と言う。

ああ、そのパン。

曜が一番最初に手に取ったものだ。

曜。

曜になにも言えなかった俺は、兄失格だ。

こんな兄を由梨子は許してくれるだろうか。

「由梨子。体、大丈夫か？」

俺がそう言うと、由梨子の手が止まる。

「……なにそれえ」

由梨子の顔がぱっと赤くなる。

「だから」

「やだ。お母さん！ お兄ちゃんに言ったの？」

由梨子が大声を出す。

母親が、なにごとかという様子で顔を出す。

「どうしたの、大きな声を出して」

「だって。お兄ちゃんが」

「ああ。今日のこと？ 由梨子が言ったんでしょ」

「言っていないよ」

「あらま」

二人の視線が俺に向けられる。

「え？　なんだよ。や、だからさ。あれだろ。つまり、あれ。だから。俺が」

俺が。

コホン、と咳をする。

「『おじさん』になるってことだろ」

「……は？」

ああ、このお二人さんには、直接的な言葉を使わないとだめだったか。

「だから、由梨子が子どもを産めば、おれはおじさんに」

由梨子と母親の顔から表情が消えた。

「お兄ちゃん！」

「由梨子、あんた、妊娠？！」

「お母さん、違うってば」

「何を言っているんだ、由梨子。隠すなよ。俺たちは家族で」

「ちよっと待って。お昼にお兄ちゃんが曜くんに会いに行ったのって」

「きやあー！！　嘘！　お兄ちゃんが曜ちゃんに？　なに？　一体どうして」

「だから、おまえの赤ちゃんの父親は」

「きやあー！！　うそ、うそっ！　もう、信じられない！！」

「由梨子、どういうことなの？」

「だから、由梨子は曜の子どもを」

「由梨子！」

「もう、やだ！　もう」

もうもう、と牛になった由梨子はそのまま机につっぷして泣きだ

した。

母親と俺とで無言でその様子を眺める。

「で。曜くんはなんて」

母親の言葉に、由梨子の肩がぴくんと動く。

「いやぁ。それが」

「早く言いなさいよ」

「俺、言えなくて」

「は？」

「いや、行くことは行っただけだ。つつい新作のパンの話で盛り上がってそこまでは話ができなくて」

由梨子がぱっと顔を上げる。

「つまり、曜ちゃんにはなにも言っていないってこと？」

「申し訳ない」

「私の話はしてないってことだね」

「その通り」

由梨子は、そのまま体をのしイカのようにだらりと机の上に伸ばした。

「心臓、止まるかと思った」

そんな伸びきった由梨子に「妊娠、してないのね」と母親が言った。

「当たり前でしょ」

由梨子が言う。

「え。妊娠してないの？」

俺も言う。

「当たり前。今日は、健康診断の婦人科の検診で近所の産婦人科に行つたの」

検診。

「結果は一週間後に来院か郵送ってことだから、郵送でお願いした」

検診、とは。

「お兄ちゃん。産婦人科イコール妊娠だなんて。短絡的だよ」

「すまん」

「ああ、でも。よかった、ほんと、よかったあ」

のしイカ由梨子が、ますます伸びながら言う。

「で。曜さんと由梨子はお付き合いをしているの？」

いつもはくらげのような母親の鋭い一刺しがきた。

「そんなわけではないよ」

由梨子が即答する。

母親がため息をつく。

「残念」

残念？

「お母さん、曜さんの顔、好みなのに」

その発言に、由梨子と俺はびっくりする。

男の好みまで似ていたのか、この母娘は。

その割にはちっともその好みの顔とは遠い、今日は朝からサックスの練習に行っている父親の顔を思い浮かべた。

「沙希、健康診断してる？」

夕方、公園を歩きながら沙希にそう訊く。

「うん。してるよ」

「婦人科検診っていうの？ あれもしたほうがいいらしいぜ」
「うわぁ。ニイ。妹がいるだけあって、色々知っているのね」

沙希が感心したような顔をする。

おお。沙希が天使に見える。
しかし。

「子どもは男がいいなあ」

「いきなり」

「いやぁ。女の子だと色々心配ごとが多い気がする」

「心配ごとねえ。まぁ、そうかもねえ」

沙希も思い当たる節があるのか、ふむふむと頷く。

「まぁ、男の子でも心配ごとはあるんだろうし。きっと、子どもって男女の性別関係なしに親にとっては心配なものなんじゃない？」

「そうかもねえ」

「そういえばさ。婦人科検診ってどんなことすんの？」

検診、検診とよく耳にはするけれど。

実際はどんなことをしているのか知らなかったから。

「……まぁさ。言ってもいいけど」

珍しく沙希が言葉に詰まる。

「上から訊きたい？ 下から訊きたい？」

「え？ 上とか、下とかあるんだ。じゃ、上から？」

沙希は「上は私も未経験だから、聞いた話ってことで」と前置きした後、男にとっては想像もつかないような検査内容を、それはそれは詳しい描写で語ってくれた。

……。

女の人には、親切にしようと思った。
年齢に関係なく。

17 お兄ちゃんには、わかりません。(後書き)

物語は完結しているのですが、感想をいただき、感激してアップしたお話です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5291p/>

うりこ姫と天の邪鬼

2011年8月8日00時54分発行